

東京大学 東洋文化研究所 要覧 2002



世界地図：キャーティブ・チェレビィ『ジハンニューマ』
(イスタンブル，1732年)より。

東京大学東洋文化研究所



6413042836

C3

45

2002

東京大学
東洋文化研究所
要覧
2002



東京大学東洋文化研究所



アリー・シャリーフ・ジュルジャーニー（1413年没）『諸学用語定義集』写本。
 法学、哲学、神学、言語学などイスラームの諸学の用語を簡潔に説明した書で、イスラーム世界で広く用いられた。



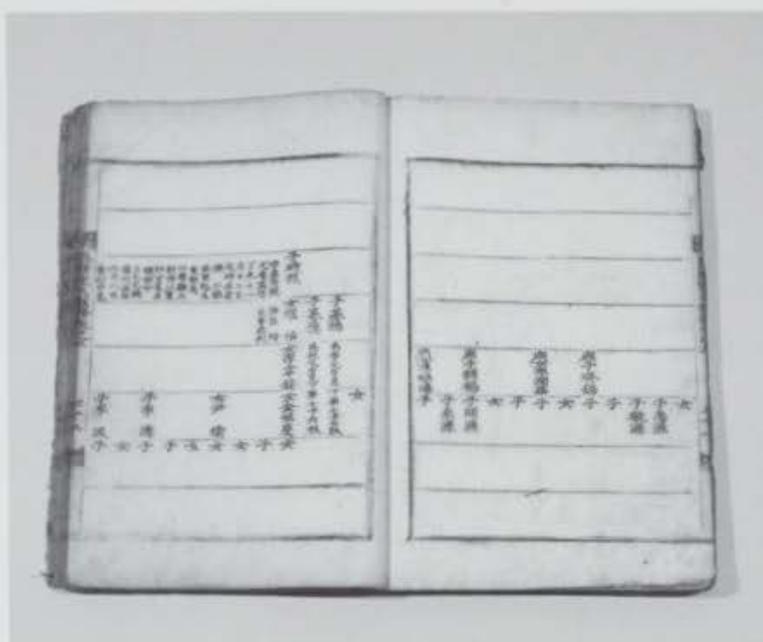
朝鮮活字本《六家注文選》
 近年韓国で影印され《文選》研究の焦点ともなっているいわゆる「秀州」本も、本研究所はより完全な形で所蔵している。



竹籠に石をつめた橋梁
(ラオス、ピエンチャン郊外)



ネパール極西部ダルチュラ郡ピャンス地方にある村チャンデルの全景 (1993年10月撮影)



《恩津宋氏族譜》

本研究所に蔵する朝鮮族譜コレクションのうちのひとつで、族譜編纂史上初期に属する形態を示す。



《礼記釈文》

撫州公使庫本と呼ばれる珍重すべき本だが、図版は近代の学者曹元忠の跋の部分。



インドの集団礼拝
(インド、ジャイプル)

織り機の少女
(ラオス、ビエンチャン郊外)



南インドの米作地帯。管井戸が活躍している。

目 次

序	
I 沿 革	1
II 組 織	5
III 職 員	9
IV 財 政	15
V 施 設	17
VI 図書・資料	19
VII 研究・教育活動	27
A 部門研究	27
B プロジェクト研究	33
C 長期国際共同研究	35
D 班 研 究	37
E 定例研究会	51
F 学術研究・調査	53
G 国際・国内学術交流	63
H 学内教育参加	70
I 執筆著書・論文等総数及び受賞	73
VIII 所員の活動	75
IX 附属東洋学研究情報センター (RICAS)	129
X 刊行物一覧	133
A 東洋文化研究所刊行物	133
B 東洋文化研究所附属東洋学研究情報センター刊行物	140

序

21世紀の世界において、アジアの重要性は社会的にも学問的にもきわめて大きい。21世紀世界の幕開けを衝撃的にそして大変痛ましい形で告げた2001年9月11日の同時多発テロは、中東から東アジアにかけての地域の動向が、世界中に決定的な影響を持っていることを証明した。この地域の政治、経済、社会、文化などさまざまな領域における矛盾や多様性、さらには地域内の複雑な関係は、世界政治に直接影響をもたらしている。とりわけ、この広大で多様な地域の日本にとっての意味は否定しがたい。近隣の朝鮮半島や中国との関係、さらにはアセアン諸国との関係は、日米関係や日欧関係とならぶ日本外交の柱である。また、エネルギー安全保障面からみて中東、中央アジア諸国、東南アジア諸国の重要性も際だっている。この広大で多様な地域に対する理解を向上させることなくして、日本の将来もなければ、世界の平和と安定の基礎も築けないのではない。

このような社会的意味に加えて、中東から東アジアに至る広大なアジア世界は、学問的にも巨大な挑戦を21世紀の学界につきつけている。多様で複雑な歴史をもつ諸文化が、グローバリゼーションが進行する中で、どのように適応と反発のプロセスを繰り返しながら、新たな形態を獲得していくのか。これまでの学問研究の良き伝統は保持しつつも、創造的に新たなアプローチを作り上げることなくして、この巨大な変化の諸相を的確にとらえることは困難である。新たな概念形成・理論形成の実験場として、アジアほど興味深い場所はない。

この中東から東アジアに至る広大なアジアこそ、東洋文化研究所の研究領域である。この社会的にも学問的にも人類にとって巨大な意味をもつアジアについての学問的理解を深めること、これが東洋文化研究所の使命である。現代国際政治におけるイスラームの意味を考えるにしても、経済的な中国の台頭の影響を分析するにしても、インド・パキスタンの核開発やカシミール問題の今後を展望するにしても、アフガニスタンの復興と中央アジアの安定を目指すにしても、東南アジアを中核とする東アジア共同体の将来にビジョンを膨らませるにしても、この地域に関する本格的学問理解が不可欠である。そして、本格的学問理解とは、単

に現在の事象を追いかけるだけでは得られない。歴史と複雑な文化的背景の理解なくして、これらの切実な問題に十全な回答を与えることはできない。21世紀アジアの将来をみすえた上で、その理解に必要な研究を徹底的に行う。これが東洋文化研究所の現在の優先課題である。

いうまでもなく、この巨大な課題のすべてを限られた人員の比較的小規模の研究のみで行うことはできない。しかし、学問研究というものとはただ数を集めればいいのか、ただ共同で研究すればいいという形で成果があがるものではない。個性的な研究者が、独自の着眼点をもち、鋭い方法で対象に切り込むとき、そして、このような研究者たちが論争を通して切磋琢磨していくとき、はじめて学界にも社会にも貢献する研究ができあがるものだと思う。その意味で、東洋文化研究所のスタッフは、みな「顔の見える」個性的な研究者である。たとえば悪いかもしれないが、わが研究所は、個々の人員の個性をなくした軍隊組織ではない。あえていえば、一騎当千の英雄豪傑のつどう梁山泊のようなところなのである。

したがって、私たちの考えるアプローチは、個性的なスタッフの学問的可能性を最大限に生かす形での多重ネットワーク型研究である。学際的国際的に広い網の目を持ったネットワークを組み合わせるアプローチである。国内や欧米のアジア研究者たちとの研究交流を今まで以上に活発にしつつも、アジア地域のアジア研究者たちとの研究交流を格段に進展させる計画である。現在、本研究所で企画している英文雑誌をそのための重要なメディアとしたいと思う。いずれにせよ、研究成果は、共同研究をまとめた形で現れる場合もあれば、個々人の単独の論文や著作となって現れることもある。いかなる形であれ、学問的インパクトの大きい研究、これが私たちの目標である。学問的インパクトの大きい研究こそが社会的にも大きなインパクトを持ちうるからである。

21世紀アジアの総合研究を行う「梁山泊」は、決して社会に対して閉ざされた研究機関ではない。その成果は、従来の刊行物や大学院教育の形以外にもインターネットやさまざまなセミナーの形で社会の多くの方々と共有していきたいし、多くの方々からの教を請いたい。そのような試みの一つとして2001年度には、研究所創立60周年を記念して一般読者向けのアジア理解の入門書『アジアを知れば世界が見える』（小学館）を出版した。多様なアジアを知るための格好の入門書であろうと自負している。

2002年4月

所長 田中 明彦

I 沿革

1. 略史

【研究部門】

本研究所は1941年11月26日、東洋文化の総合的研究を目的として、東京（帝国）大学に設置創設された。哲学・文学・史学部門、法律・政治部門、経済・商業部門という部門体制で、附属図書館内に研究室、書庫、事務室を置いて発足した。1949年、新たに3部門が増設されたのを機会に研究組織を細分化し、哲学・宗教部門、文学・言語部門、歴史部門、美術史・考古学部門、法律・政治部門、経済・商業部門の6部門に再編成した。同時に本拠を文京区大塚町の外務省所管の旧東方文化学院の一部に移し、これまでの附属図書館内研究室を分室として、研究の充実・発展をはかった。

ついで1951年、人文地理学部門と文化人類学部門が加えられた。これを契機として、従来の諸科学の専門体系による部門構成を、汎アジア経済部門、汎アジア人文地理学部門、汎アジア文化人類学部門、東アジア政治・法律部門、東アジア歴史部門、東アジア美術史・考古学部門、東アジア哲学・宗教部門、東アジア文学部門という地域区分を加味した8部門に再編成した。地域部門の充実をはかる将来計画にもとづいて、1960年には南アジア政治・経済部門、1964年には東北アジア部門、1968年には西アジア歴史・文化部門、1973年には東南アジア経済・社会部門、1978年には西アジア政治・経済部門が増設されて、ようやく13部門を擁するにいたった。

さらに、アジア地域全体が世界のなかでしめる重要性が大きくなったことが明らかになったのに対応させて、本研究所がわが国のアジア研究の中核的、指導的役割を果たすために、研究内容の充実、規模の拡大を含む組織上の再編成を行うことが必要となった。そこで、1981年より新しい構想に基づく大部門制を採用し、これまでの13部門を、汎アジア部門、東アジア部門、南アジア部門、西アジア部門の4部門に統合して再出発し、今日にいたっている。

【附属東洋学研究情報センター】

1999年度に、東洋学文献センターを廃止して、比較文献資料学と造形資料学という2つの分野から構成される東洋学研究情報センターが新設された。1966年の設立以来東洋学文献センターが実施してきた文献資料に関するドキュメンテーション業務は、アジア全域の文献を対象とする比較文献資料学分野に引き継がれている。さらに、アジア文化研究にとって不可欠な絵画・考古資料等を対象とする造形資料学分野が新しく追加された。この両分野での研究成果を、アジア研究のための基礎的研究情報として世界に発信していく計画である。なお、この新設にともない、国内客員教授が1ポスト配置された。

【建物】

創立以来23年にわたって、本研究所は附属図書館内研究室や外務省所管の建物に仮住いの状態のままであったが、1967年に、本郷構内に総合研究資料館（現総合研究博物館）との合同庁舎が完成し、5階以上を本研究所が使用することになった。

しかしその後、研究組織の拡充、研究活動の多様化、図書・資料の増加などにもともない、狭隘な施設の改善、とくに書庫の緊急な増設等の強い要望があり、1983年にいたって総合研究資料館（現総合研究博物館）との交換分合により、本研究所が合同庁舎を全館使用することになった。これにともなって全面的に改修工事を行い、1984年3月に工事が完成し、本研究所の建物総面積は6,577平方メートルで、地下1階より地上8階までとなった。3階までを所長室、事務室、図書館、附属東洋学研究情報センター、会議室等とし、3階の一部と4階以上は各研究部門の研究室である。なお地下から8階まで（2階を除く）の北西部分（約1,800平方メートル）は書庫にあてられている。また、1995年には旧東方文化学院前の獅子像が大塚から東洋文化研究所に移設された。

2. 研究活動と将来計画

【研究所の特色】

対象地域は、東から西アジアまでとほぼユーラシア大陸の過半となっているし、また研究対象も考古から現代研究、人文科学から社会科学まで含んでいる。我が国では他に類がないこういう幅広い範囲を研究対象として、本研究所の研究者は各自の専門に従った課題のもとに個人研究を進めている。同時に、各専門分野の孤立を避け、アジア諸地域の総合的研究を推進するという本研究所本来の目的を

達成するために、共同研究会や各種研究班を組織化して学際的研究を育ててきている。また研究陣容の補強を図るため、学内外の専門分野の研究者に研究を委嘱し、協力を求める方針をとってきた。本学の他の部局ならびに他大学等でのアジア研究と比較して、本研究所の研究の特色を述べるならば、それは文献研究と現地調査を有機的に結合させた、古典研究と現代研究との統合と表現できる。

【研究プログラム】

1993年度から長期計画研究として「激動するイスラーム圏の政治・社会構造の変容過程の研究」、「中国社会の変動が及ぼすアジア諸国への影響の研究」、さらに1996年度から「環ベンガル湾地域における社会・経済・文化の交錯と変動」を所員全員の参加のもとに進めてきた。2001年度、共同研究の枠組みを組み直し、以下の四つのプログラムを推進することにした。

1. 先端地域研究プログラム

「東南アジアを結節点とする域際アジア交易・交流と移民社会の役割」

2. 新分野開拓研究プログラム

「アジア諸文化間の多元的共生を求めて——過去から未来へ」

3. 広域連携研究プログラム

「アジア的人間——環境系モデル」の構築とその実践的検討

4. 資料情報研究プログラム

「アジア諸社会におけるエリートのネットワークと文化表象——比較研究の試み」

それぞれのプログラムは、学内・学外・国外の研究機関との間でワークショップやシンポジウムを組織するなど、多重ネットワーク構造のコアとしての役割を果たすことにしている。

【海外との交流】

海外研究機関との日本における交流拠点となることが本研究所の目的の一つである。そのため、本研究所は、1995年10月、香港大学アジア研究センターと学術交流協定を締結し、1997年4月、シンガポール国立大学社会科学との間で学術交流協定を締結し、2000年9月には、インドネシア大学日本研究センターとの間で学術交流協定を締結した。また、1996年12月に東京大学と復旦大学の学術交流協定担当部局となった。今後も、各国の研究機関との提携を深めていく予

定である。

【大学院・学部教育】

現在、本研究所の教官はみな東京大学における大学院教育ならびに学部教育に積極的に携わっている。アジア研究に関する若手研究者の育成は、本研究所設立当初からの一貫した目的であって、大学院研究科などとの協力関係は今後も非常に重要な課題である。これまでも6研究科ならびに6学部で講義を担当してきており、2000年度新たに設立された大学院情報学環・学際情報学府とも緊密な関係を維持してきている。これまでも、研究所として独自の大学院教育の構想を企画してきたが、今後も大学全体の将来構想との関連のなかで、より学際的で総合的なアジア研究の大学院教育プログラムの形成に寄与していきたい。

II 組織



【歴代所長】

氏名	在職期間	氏名	在職期間
桑田 芳蔵	1941.11.26-43. 3.31	窪 徳忠	1973. 4. 1-74. 3.31
宇野 圓空	1943. 4. 1-46.10. 5	佐伯 有一	1974. 4. 1-76. 3.31
戸田 貞三	1946.10. 6-47. 9.30	大野 盛雄	1976. 4. 1-78. 3.31
辻 直四郎	1947.10. 1-54. 3.31	深井 晋司	1978. 4. 1-80. 3.31
仁井田 陞	1954. 4. 1-58. 7.10	中根 千枝	1980. 4. 1-82. 3.31
飯塚 浩二	1958. 7.11-60. 7. 9	大野 盛雄	1982. 4. 1-84. 3.31
結城 令聞	1960. 7.10-62. 7. 9	尾上 兼英	1984. 4. 1-86. 3.31
江上 波夫	1962. 7.10-64. 7. 9	山崎 利男	1986. 4. 1-88. 3.31
飯塚 浩二	1964. 7.10-65. 2.28	斯波 義信	1988. 4. 1-90. 3.31
小口 偉一	1965. 3. 1-66. 3.31	池田 温	1990. 4. 1-92. 3.31
川野 重任	1966. 4. 1-68. 3.31	松谷 敏雄	1992. 4. 1-94. 3.31
小口 偉一	1968. 4. 1-70. 3.31	後藤 明	1994. 4. 1-96. 3.31
泉 靖一	1970. 4. 1-70.11.15	濱下 武志	1996. 4. 1-98. 3.31
川野 重任 (事務取扱)	1970.11.16-70.12.17	原 洋之介	1998. 4. 1-2002. 3.31
鈴木 敬	1970.12.18-72. 3.31	田中 明彦	2002. 4. 1-現在
荒 松雄	1972. 4. 1-73. 3.31		

【名誉教授】

氏名	称号授与	氏名	称号授与
江上 波夫	1967. 5	板垣 雄三	1991. 5
川野 重任	1972. 5	池田 温	1992. 5
窪 徳忠	1974. 5	田仲 一成	1993. 5
鈴木 敬	1981. 5	友杉 孝	1993. 5
荒 松雄	1982. 5	松丸 道雄	1995. 5
山田 三郎	1992. 5	松谷 敏雄	1997. 5
松井 透	1987. 5	蜂屋 邦夫	1999. 5
中根 千枝	1987. 5	岡本 サエ	2001. 5
尾上 兼英	1988. 5	後藤 明	2002. 5
山崎 利男	1990. 5		

【歴代事務長】

氏名	在職期間	氏名	在職期間
山高 力三	1941.11.27-42. 9.30	三浦 皓守	1977. 7. 1-81. 3.31
根本 喜蔵	1942.10. 1-44. 7. 9	伊東秀三郎	1981. 4. 1-83. 3.31
長内太郎吉	1944. 7.10-54. 7.15	岡部 藤男	1983. 4. 1-86. 3.31
工藤松之助	1954. 7.16-63.10.31	木内 義一	1986. 4. 1-90. 3.31
宮本 健	1963.11. 1-69. 2.28	江澤 兵治	1990. 4. 1-92. 6. 1
新井 康次	1969. 3. 1-74. 3.31	石川 純男	1992. 6. 1-95. 3.31
斎藤 益	1974. 4. 1-77. 6.30	千葉 勝志	1995. 4. 1-97. 3.31

小林 邦男 1997. 4. 1-99. 3.31
石井 金夫 1999. 4. 1-2001. 3.31

柿沼 肇 2001. 4. 1-現在

【歴代受賞者】

本研究所の教官の文化勲章・文化功労賞・日本学士院賞の各受賞者は次の通りである。

文化勲章	江上 波夫	1991年
	中根 千枝	2001年
文化功労者	辻 直四郎 (併)	1978年
	江上 波夫	1983年
	山本 達郎 (併)	1986年
	川野 重任	1993年
	中根 千枝	1993年
日本学士院賞	仁井田 陸	1934年
	宇野 圓空	1942年
	山本 達郎 (併)	1952年
	周藤 吉之	1956年
	福島 正夫	1963年
	鎌田 茂雄	1976年
	荒 松雄	1978年
	池田 温	1983年
	鈴木 敬	1985年
	田仲 一成	1993年

Ⅲ 職 員 (2002年10月1日現在)

所 長 田中 明彦

汎アジア部門

原 洋之介^(研) 教 授 (710室)
池本 幸生 教 授 (707室)
高地 薫 助 手 (513室)
猪口 孝 教 授 (702室)
田中 明彦 教 授 (708室)
松井 健 教 授 (703室)
菅 豊 助教授 (711室)
関本 照夫 教 授 (712室)
名和 克郎 助教授 (308室)

東アジア部門 (第一)

高見澤 磨 助教授 (403室)
黒田 明伸 教 授 (402室)
平勢 隆郎^(研) 教 授 (407室)

東アジア部門 (第二)

丘山 新 教 授 (508室)
橋本 秀美 助教授 (502室)
尾崎 文昭 教 授 (511室)
大木 康 助教授 (503室)
小川 裕充 教 授 (510室)

南アジア部門

加納 啓良 教 授 (607室)
高橋 昭雄 教 授 (610室)
柳澤 悠 教 授 (603室)
中里 成章 教 授 (608室)
永ノ尾信悟 教 授 (611室)
上村 勝彦 教 授 (602室)
片岡 啓 助 手 (613室)

西アジア部門

鈴木 董 教 授 (803室)
羽田 正 教 授 (807室)
榎屋 友子 助教授 (810室)
鎌田 繁 教 授 (802室)

国際学術交流室

関守 ゲイノー 助教授 (306室)

附属東洋学研究情報センター

センター長	田中 明彦(併)
センター主任・教授	長澤 榮治 (811室)
教授	濱下 武志(併) (411室)
助教授	板倉 聖哲 (306室)
客員教授	高島 淳 (813室)
助手	大田 省一 (413室)

研究機関研究員*

陶安あんど
吉開 将人
張 欣
柴崎 麻穂
大石 高志
久米 高史

非常勤講師*

田口 理恵
金田 真滋
池田 知正
土屋 昌明
陳 捷
大石 高志
太田 信宏
榑 和良
山口 昭彦
医王 秀行
深見奈緒子
嶋 陸奥彦
池田美佐子
藤井 守男
森 洋久
金 漢益
小泉 龍人
首藤 久人
井上あえか
前川 亨
堀井 優

*2000～2002年度

事務部

事務長 柿沼 肇
総務主任 守屋 勝國
図書主任 濱田 悟

庶務掛

庶務掛長 大澤 悦子
事務官 小野口幸雄
事務官 中井 珠美

会計掛

会計掛長 関 豊
事務官 大山 文明
事務官 坂上 俊宏

研究協力掛

研究協力掛長(併) 守屋 勝國
研究協力掛主任 竹澤 融

図書第一掛

図書第一掛長 上田 公一
事務官 渋谷 義治

図書第二掛

図書第二掛長 栗林久美子
事務官 新居 彌生
事務官 長野 真
事務官 山口 淳
事務官 大川 直子

業務掛

業務掛長 佐々木郁子
事務補佐員 清水 裕子

遺跡調査室

技 官 野久保雅嗣

職員数 (2002年10月1日現在)

教授 19名 助教授 8名 助手 3名 事務官 19名
技官 1名

教職員の異動等 (2000年4月～2002年10月)

(教官)

2000. 4. 1 教授 濱下武志 京都大学東南アジア研究センターに転任
2000. 4. 1 教授 田中明彦 大学院情報学環に配置換
2000. 4. 1 教授 平勢隆郎 大学院情報学環に配置換
2000. 4. 1 濱下武志 教授併任 (東アジア部門, 本務先: 京都大学
東南アジア研究センター)
2000. 4. 1 田中明彦 教授併任 (汎アジア部門, 本務先: 大学院情
報学環)
2000. 4. 1 平勢隆郎 教授併任 (東アジア部門, 本務先: 大学院情
報学環)
2000. 8. 31 助教授 甘 懐真 任期満了により退職
2001. 3. 31 教授 岡本サエ 停年退職
2001. 3. 31 助手 鈴木隆泰 退職
2001. 3. 31 客員教授 深見奈緒子 任期満了
2001. 4. 1 助手 森本一夫 北海道大学大学院文学研究科助教授に昇任
2001. 4. 1 山本和也 助手 (汎アジア部門) 採用
2001. 4. 1 片岡 啓 助手 (南アジア部門) 採用
2001. 4. 1 濱下武志 教授併任 (東アジア部門, 本務先: 京都大学
東南アジア研究センター)
2001. 4. 1 田中明彦 教授併任 (汎アジア部門, 本務先: 大学院情
報学環)
2001. 4. 1 平勢隆郎 教授併任 (東アジア部門, 本務先: 大学院情
報学環)
2001. 4. 1 大木 康 助教授併任 (東アジア部門, 本務先: 大学院
人文社会研究科)
2001. 4. 1 教授 後藤 明 任期付分野に配置換
2001. 5. 1 助手 山本和也 大学院情報学環に配置換
2001. 5. 15 元教授 岡本サエ 名誉教授の称号授与
2001. 6. 1 井手誠之輔 客員教授併任 (附属東洋文化研究情報セン

- ター、本務先：独立行政法人文化財研究所東京文化財研究所)
2001. 10. 1 高地 薫 助手(汎アジア部門)採用
2001. 11. 1 大田省一 助手(附属東洋学研究情報センター)採用
2001. 11. 1 SEKIMORI GAYNOR MEREDITH 助教授(国際
学術交流室)採用
2002. 3. 31 教授 後藤 明 任期満了により退職
2002. 3. 31 客員教授 井手誠之輔 任期満了
2002. 4. 1 教授 田中明彦 大学院情報学環から配置換
2002. 4. 1 教授 田中明彦 所長・附属東洋学研究情報センター長併任
2002. 4. 1 助教授 池本幸生 教授昇任
2002. 4. 1 助教授 大木 康 大学院人文社会研究科から配置換
2002. 4. 1 教授 原 洋之介 大学院情報学環へ配置換
2002. 4. 1 教授 宮嶋博史 東アジア部門へ配置換
2002. 4. 1 教授 中里成章 南アジア部門へ配置換
2002. 4. 1 教授 長澤榮治 附属東洋学研究情報センターへ配置換
2002. 4. 1 濱下武志 教授併任(附属東洋学研究情報センター、本
務先：京都大学東南アジア研究センター)
2002. 4. 1 原 洋之介 教授併任(汎アジア部門、本務先：大学情
報学環)
2002. 4. 1 平勢隆郎 教授併任(東アジア部門、本務先：大学情報
学環)
2002. 4. 30 教授 宮嶋博史 退職(5月1日付大韓民国成均館大学校東ア
ジア学術院教授就任)
2002. 5. 1 高島 淳 客員教授併任(附属東洋学研究情報センター、
本務先：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究
所)
2002. 5. 14 元教授 後藤 明 名誉教授の称号授与
2002. 10. 1 助教授 高橋 昭雄 教授(南アジア部門)に昇任
2002. 10. 1 助教授 黒田 明伸 教授(東アジア部門)に昇任
- (事務官)
2001. 3. 31 事務長 石井金夫 定年退職
2001. 4. 1 図書主任 笠原昌一郎 大学院法学政治学研究科・法学部図書主

任に配置換

2001. 4. 1 会計掛長 穴沢伸一郎 大学院総合文化研究科・教養学部等事務部総務課教務事務掛長に配置換
2001. 4. 1 図書第一掛長 飯野洋一 大学院農学生命科学研究科・農学部学術・雑誌情報掛長に配置換
2001. 4. 1 会計掛主任 三浦弘三 放送大学学習センター部図書課管理掛長に昇任
2001. 4. 1 図書第二掛員 笠井伊里 史料編さん所図書整理掛員に配置換
2001. 4. 1 史料編さん所事務長 柿沼 肇 事務長に配置換
2001. 4. 1 附属図書館情報管理課受入主任 濱田 悟 図書主任に配置換
2001. 4. 1 附属図書館総務課管理掛主任 関 豊 会計掛長に配置換
2001. 4. 1 附属図書館情報サービス課国際資料掛長 上田公一 図書第二掛長に配置換
2001. 4. 1 大学院人文社会研究科・文学部司計掛員 大山文明 会計掛員に配置換
2001. 4. 1 情報基盤センターデジタル・ライブラリ掛員 大川直子 図書第一掛員に配置換
2001. 6. 30 図書第一掛員 神田百合枝 勸奨退職
2001. 12. 31 庶務掛主任 益子一郎 勸奨退職
2002. 1. 1 分子細胞生物学研究所庶務掛員 小野口幸雄 庶務掛員に配置換
2002. 4. 1 図書第二掛長 岩淵玲子 大学院教育学研究科・教育学部図書整理掛長に配置換
2002. 4. 1 会計掛員 割田秀彦 物性研究所附属中性子散乱研究施設に配置換
2002. 4. 1 国立情報学研究所広報調査課情報資料係長 栗林久美子 図書第二掛長に配置換
2002. 4. 1 先端科学技術研究センター用度掛員 坂上俊宏 会計掛員に配置換

IV 財 政

1. 校 費

年度	決算額 (千円)	年度	決算額 (千円)	年度	決算額 (千円)
1996	198,800	1998	198,365	2000	179,674
1997	171,941	1999	175,891	2001	192,131

2. 科学研究費補助金

2000 年度			2001 年度		
研究種目	交付決定額 (千円)	件数	研究種目	交付決定額 (千円)	件数
基盤研究 (B) (1)			基盤研究 (B) (1)	10,700	2
基盤研究 (B) (2)	5,300	2	基盤研究 (B) (2)	3,700	1
基盤研究 (C) (1)	700	1	基盤研究 (C) (1)	2,200	1
基盤研究 (C) (2)	1,500	1			
特定領域研究(A)(1)	8,100	1			
特定領域研究(A)(2)	6,000	3	特定領域研究(A)(2)	4,800	2
			奨励研究 (A) (2)	1,200	1
特別推進研究(2)	130,000	1	特別推進研究(2)	15,600	1
特別研究員奨励費	11,700	12	特別研究員奨励費	9,200	9
合 計	163,300	21	合 計	47,400	17

3. その他の経費

以上のほか、「Ⅶ F 学術研究・調査」の項で後述するように、以下の財団より研究助成を受け入れた。

サントリー文化財団

韓国学術振興財団

国際交流基金日米センター

松下国際財団

米日財団

V 施設

1. 建物

- 1941年11月 東京帝国大学附属図書館内に新設
- 1948年9月 文京区大塚町56旧東方文化学院建物に移転。附属図書館内に分室をおく。敷地面積 5,081.22 m² 本館建物面積 3,012.5 m² (内 1,500 m² 程は外務省研修所が使用)
- 1965年10月 本郷構内新庁舎第1期工事完成により一部移転
- 1968年7月 全面移転完了
- 1982年3月 総合研究資料館(現総合研究博物館)と交換分合し、全館を使用。建物面積 6,577 m²
- 1984年3月 全面改修工事完成
- 1999年8月 西側外壁の五階以上の北半大崩落 幸い人身事故に及ばず
- 2000年3月 西側外壁の大崩落に伴う外壁全面修理終わる

当研究所の現在の建物は、1965年に一部建築され、その後、増築・改修を経たものの、老朽化と狭隘化の二つの問題を抱えている。そのうち、雨漏りや内外壁面の劣化とヒビ割れについては、1984年の全面改修工事により、一応解消されたと考えられていた状況で、1999年に西側外壁タイルの大崩落がおきた。その後の外壁の全面修理により、応急処置が取られたとはいえ、給排水システム、集中暖房システム等建物全体の老朽化については、危機的であることが判明している。

狭隘化についても、問題は解消されてはいない。世界的な水準の漢籍を所蔵する関係で、建物の全スペースの3割以上を書庫や閲覧室として、収集・公開の充実を計っているものの、漢籍を含む中国語文献の飛躍的増加や、アラビア語などの非漢字文献の積極的収集により、すでに限界を超え、分類・配架が不可能になりつつある。また、附属東洋学文献センターを改組・拡充し、1999年より、東

洋学研究情報センターが発足したのに伴い、従来から行ってきた情報資料の収集・公開をより一層進展させようとの計画に関しても、現在のスペースでは、完全に不足する状況となっており、抜本的な増築が望まれる。

2. コンピュータ・ネットワークの状況

本研究所は1996年度から、複数のサーバ・マシンに研究所の大多数のパソコンがクライアントとして接続されるネットワーク・システムを構築し、教官の研究、図書・資料、一般事務に関する多くの情報をWebページに公開し運用するようになった。2002年3月現在、このネットワークの基幹部分の管理・運用は研究所教授会のもとに設置されたネットワーク委員会（現インフラ委員会）の手で、またWebページの作成と更新はホームページ委員会の管轄下で行われている。

研究情報としては、『東洋文化研究所所蔵漢籍目録』、『現代中国書目録』、『世界と日本』、『近現代中国関係雑誌記事』、『南アジア文献検索』、『近代朝鮮関係日本語図書所在目録』、『イスラム事典』などが公開されている。これ以外にも、多数のデータベースをWebページ上に構築中である。また、全教官の研究業績と業務上のEメール・アドレスを公開している。さらに事務情報としては、教官系と事務官系を統合して、各種行事の開催、公募人事の情報などをオンラインで公開している。

本研究所は、附属東洋学研究情報センターを中心として、アジアについての研究・資料情報の収集と蓄積、分析と加工、およびそのインターネットによる公開を重視し、そのための各種改革に努めている。同センターもまた『アジアデジタル展示館』を構築し、『東洋文化研究所所蔵西域壁画断片』、『仁井田文庫北京水売買文書』、『東洋文化研究所所蔵古籍線装書』、『インド・イスラーム史跡』などの画像データベースをWebページ上に公開している。

なお以上すべてが、次のURLによるホームページからアクセス可能である。

<http://www.ioc.u-tokyo.ac.jp>

VI 図書・資料

東洋学研究情報センターの研究活動を支える、文献資料、非文字資料の東洋文化研究所における蓄積状況は、以下の通りである。

1. 図書

本研究所は、アジア諸地域に関する図書資料を約 59 万冊、雑誌を約 5,588 種所蔵している。とくに漢籍は今日では収集不可能な貴重なものが多く、日本では有数のコレクションである。その他に、中国語、朝鮮語、アラビア語、トルコ語、ベルシャ語、インドネシア語、サンスクリット語などの図書・雑誌も鋭意収集に努めている。

本研究所の図書・雑誌数は 2002 年 3 月 31 日現在、次のとおりである。

和・中・朝文図書	450,554 冊	
洋文図書	143,124 冊	計 593,678 冊
和文雑誌	1,753 種	
朝文雑誌	313 種	
中文雑誌	2,388 種	
洋文雑誌	1,134 種	計 5,588 種

この他、マイクロフィルム約 5,540 巻、マイクロフィッシュ約 117,570 枚を所蔵する。

主要所蔵図書

[大木文庫] 本研究所創設時に、大木幹一氏より中国法制関係書総数 3,168 部、45,452 冊の寄贈を受けた。公牘類の数百部は本文庫の柱梁をなし、法律関係の貴重書をはじめ、明清以後の時期の研究には不可欠の蒐集資料である。1959 年に『東京大学東洋文化研究所大木文庫分類目録』が編纂され、刊行された。

[帝国学士院東亞諸民族調査室旧蔵書] 1944 年帝国学士院東亞諸民族調査室の解散にともない、その蔵書の和漢洋書・雑誌・資料等 2,000 冊が移管された。この

なかには西欧におけるアジア諸民族研究の主要な文献が集められている。

[東方文化学院旧図書] 1929年に、東方文化に関する研究機関として、外務省所管の東方文化学院東京研究所が創設されたが、1948年に廃された。その旧蔵書と漢洋あわせて103,587冊が、1967年3月に本研究所に移管された。漢籍の中核は、1929年に中国浙江省の徐則恂氏より一括購入した東海蔵書楼蔵書である。

[松本忠雄氏旧蔵書] 1949年度科学研究費により松本忠雄氏旧蔵の和漢洋書、雑誌など約3,000冊を購入した。とくに近代中国研究資料として重要なものがある。

[長澤規矩也氏旧蔵書] 1951・53両年度科学研究費により、長澤規矩也氏旧蔵の約3,000冊を購入した。その内容は明清時代の戯曲小説類である。1961年1月、本研究所創立20年にあたり、同氏から約150冊の補充を得るとともに、『雙紅堂文庫分類目録』を刊行した。

[清野謙次氏旧蔵書] 1952・53両年度科学研究費により、清野謙次氏旧蔵洋書750冊を購入した。人類学・考古学関係のものを根幹とする。1978年3月に『東京大学東洋文化研究所清野文庫分類目録』を刊行した。

[矢吹慶輝氏旧蔵書] 1952年度科学研究費により、矢吹慶輝氏旧蔵洋書約360冊を購入した。英仏独のマニ教の文献を中心とし、仏教遺跡の発掘報告書も含まれている。

[下中文庫] 下中弥三郎氏より、1953年1月から1957年6月までの、戦後出版の中国書4,500冊、中国雑誌10種および戦後出版の東洋関係洋書130冊の寄贈を受けた。とくに中国書は、当時入手できた書の主要なものをほとんど網羅している。

[東京銀行調査部旧蔵資料] 1959・60両年度にわたり、東京銀行調査部所蔵の経済関係書を主とする和漢書・資料類約18,000冊の寄贈を受けた。

[仁井田陸氏旧蔵書] 本研究所名誉教授仁井田陸氏の逝去(1966年6月)後、所蔵の中国書5,000冊、洋書120冊、和書2,200冊、清代公私文書類900余点、50基の碑文の拓本を受け入れた。大木文庫とともに旧中国の社会研究に重要なものである。1999年3月に『東洋学文献センター叢刊 別輯24 東京大学東洋文化研究所仁井田文庫漢籍目録 附和洋書』を刊行した。また清代公私文書類も「東京大学東洋文化研究所 仁井田陸博士蒐集中國文書目録(稿)」として整理した。

[我妻栄氏旧蔵資料] 我妻栄氏の逝去(1973年10月)後、所蔵の和洋法学文献および各種資料が東京大学に寄贈された際、本研究所はとくにアジア法制関係文献資料総数647部932冊の寄贈を受けた。1982年3月に『我妻栄先生旧蔵アジア法制関係文献資料目録』を刊行した。

[倉石武四郎氏旧蔵書] 1975年度に本学名誉教授倉石武四郎氏の漢籍を主とする

蔵書を収蔵することとなり、1981年度までにその重要な部分、漢籍約4,300点などを購入した。

[江上波夫氏旧蔵書] 1981・82・84各年度にわたり、本学名誉教授江上波夫氏の蔵書のうち、歴史学、民族学、考古学を中心とした洋書の一部約2,550点を購入した。

[The Daiber Collection I] 1986・87両年度にわたり、東洋学文献センターと協力し、ハンス・ダイバー氏の蒐集した計367点の写本を購入した。イスラームの宗教、思想、歴史に関する重要な資料である。1988年に *Catalogue of the Arabic Manuscripts in the Daiber Collection, Institute of Oriental Culture, University of Tokyo, by Hans Daiber* を刊行した。

[文淵閣本四庫全書影印本] 1988年度に文淵閣本四庫全書影印本（索引つき）全1,501冊を購入した。清代以前の中国の古典文献を網羅した最も基本的な叢書で、中国研究上不可欠の重要性をもっている。

[オランダ植民地省公文書索引およびジャワ官報] 1989年度に、マイクロフィッシュ化された資料一式を購入した。前者はオランダ国立公文書館所蔵の旧植民地省文書（1980年～1921年）の索引書数百巻分を網羅し、後者はインドネシアのオランダ植民地政府が1928年～1939年に公布した官報の集成である。

[乾隆版大蔵経] 1990年度に全724函（毎函10冊）、大清三蔵聖教目録一函（5冊）を購入した。中国最後の木版大蔵経で、1657部の仏教典籍が収録されている。漢文の大蔵経で経版木が保存されているものは、高麗蔵とこの乾隆版のみで、きわめて貴重な資料である。

[Ouseley Collection] イギリスの外交官で東洋学者の G. Ouseley 卿（1770—1844）の旧蔵書の一部。17世紀から19世紀にかけてのヨーロッパ人のインド、中近東への旅行記とベルシャ文学作品を主とした60点、全106冊からなる。Ouseley 自身の書き込みが随所に見られる点など、資料的価値が高い。

[南アジア伝導教団資料集成] 南アジア各地で伝導活動を行ったキリスト教団の、18世紀末から20世紀までの年報、諸会議の議事録、往復文書、報告書等を含んだマイクロフィッシュ資料である。

[Indonesian Monographs, 1945—1973] オランダの王立・言語・地理・民族学研究所が蒐集した、独立後インドネシアの社会科学関係出版物3,258点をマイクロフィッシュにまとめたもの。内容はきわめて多彩で、インドネシア現代史の研究に不可欠の資料集である。

[故今堀誠二氏旧蔵書・資料] 広島大学名誉教授今堀誠二氏の逝去（1992年10月）後、所蔵の漢籍300点、中国書2,000冊、文書資料500点を購入した。近現

代中国の社会史資料、華僑史資料など多くの原資料を含む。(1994年度一般設備費)

[The Daiber Collection II] 本研究所所蔵の「Daiber Collection I」を補完する、18世紀を中心とする12世紀から20世紀初頭に至るアラビア語の写本120点の集成で、西アジア研究・イスラム研究に不可欠の一次資料である。1996年に *Catalogue of the Arabic Manuscripts in the Daiber Collection II, Institute of Oriental Culture, University of Tokyo, by Hans Daiber* を刊行した。(1994年度国立学校特別経費)

[東アジア宗族社会史関係資料] 東アジア全域にわたる宗族社会史の比較研究に重要な資料集。朝鮮族譜集成494冊、中国華南宗族社会史資料、南洋華僑・華人関係資料2,263冊からなる。族譜、社会、華人史の基本資料として貴重な資料である。(1995年度一般設備費)

[中国西北文献叢書] 陝西、甘肅、寧夏、青海、新疆などの中国西北地方に関する、歴史、地理、民俗、文学そのほかの諸分野の基本文献を網羅した叢書。(1995年度一般設備費)

[オスマン語・トルコ語年鑑定期刊行物コレクション] トルコにおいてオスマン語および現代トルコ語で刊行された年鑑類、定期刊行物。19世紀初頭オスマン帝国時代の国家年鑑や、西アジア各地方およびバルカンに関する公的な年鑑など、政治、社会、経済から文化にいたる広汎な分野を網羅し、近現代の西アジア研究者にとって類例の少ない貴重な資料群である。(1996年度一般設備費)

[西アジア関連写本集成] ミンガナ・コレクション、ロンドン大学東洋アフリカ研究所およびユダヤ国立大学所蔵のアラビア語を中心としたマイクロフィッシュによる写本集成。クルアーン学から、法学、文学、自然科学、歴史学、宗教諸学を含むイスラームを中心とした西アジアの思想・文化・歴史の研究に不可欠の資料である。(1996年度一般設備費)

[中国第一歴史档案馆所蔵清代档案資料] 1997年度に標記档案資料のマイクロフィルムを購入した。内容は「宮中硃批奏摺財政類」「軍機処録副奏摺全国水利雨水自然灾害資料」「内閣京察冊」「宮中履歴片」「戸部一度支部棒銀米冊」「琿春副都統衛門档案」「刑法部胎谷案」「吏部造送封贈姓氏冊」「清代琉球档案史料」である。これらは総数一千万件におよぶ中国第一歴史档案馆所蔵の清朝公文書の一部を成すものであり、清代中国の政治・制度・経済・社会の分析において極めて重要な第一次資料である。(1997年度一般設備費)

[前野直彬氏旧蔵書] 本学名誉教授前野直彬氏の逝去(1998年1月)後、小説類に特色を持つ所蔵の漢籍約500点4400冊を購入し、「夕嵐堂文庫」と名付けた。

中に貴重な版本を含んでいる。(1998年度リーダーシップ支援経費)

以上の各コレクションのほか、1958年度から3か年にわたって、文部省科学研究費による総合研究「アジア地域の社会・経済構造」の一環として、資料(主として洋書)1,800冊を購入し、また1961年度から1965年度まで機関研究および特定研究「アジア社会の近代化と文化の変動」において、継続して資料の蒐集に努め、総数4,771冊に達した。

2. 資料

本研究所の所蔵する諸種の資料のうち、重要なものを以下に掲げる。

〔殷代甲骨〕本研究所所蔵甲骨は、次の三部分からなる。第一は、故河井仙郎氏旧蔵の1,708片で、1979年に現蔵者井上富美子氏より寄贈された。第二は故田中慶太郎氏旧蔵の393片で、1979年に購入した。第三は旧蔵者三浦清吾氏より寄贈された2片である。合計2,103片に達し、京都大学人文科学研究所に次ぐ、わが国有数の蒐集である。これは、整理・綴合の上、松丸道雄『東京大学東洋文化研究所蔵甲骨文字 図版篇』(東洋文化研究所報告1983年)として刊行された。

〔中国歴史古銭・銭范〕旧東方文化学院の蒐集品で、殷代の貝貨、戦国時代の布銭・刀銭・郢爰からはじまり、歴代の代表的貨幣を収蔵する。約1,250点の古銭と、10点の銭の范模を含む。(整理中)

〔中国考古資料〕上記の甲骨、古銭以外に、瓦当約110点、鏡、戈、戟、鏹などの青銅器、玉器、土器、磚、磚製買地券、壁面片、俑、仏像、衣服、室内装飾品、土俗品がある。大部分は旧東方文化学院が購入し、本研究所に移管されたものである。

〔中国絵画資料(原版・焼付写真・カラースライド等)〕米国、カナダ、欧州、アジアの美術館、個人蒐集家が所蔵する中国絵画、および日本現存の中国絵画に関するものが主体で、その他に米国ミシガン大学アーカイヴより購入した中国絵画の焼付写真、東京国立文化財研究所原版からの焼付写真等があり、現在約20万点にのぼる。「東洋学文献センター叢刊」として10冊の目録が1977~83年、1992年~98年の両度にわたって刊行され、図録は東京大学出版会より『中国絵画総合図録』(全5巻)が1982年~83年、『同 続編』(全4巻)が1998年~2001年の両度にわたって刊行された。

〔中国清代・民国期の文書資料〕17世紀から20世紀におよぶ、北京をはじめ嘉興、武進、蘇州、通州、宝応、鳳山などの土地文書を中心とし、その他公私文書

類約二千数百点がある。仁井田隆名誉教授旧蔵遺贈分や旧東亜研究所収集文書等を含む。目録と内容の一部は、1983年～86年に『東洋文化研究所蔵中国土地文書目録・解説（上）（下）』（東洋学文献センター叢刊）として刊行された。（整理中）

[**内蒙古出土学術資料**] 江上波夫名誉教授が戦前に内蒙古で発掘・採集した資料約1万点が、1983年に寄贈された。主として土器片・陶器片である。資料の一部は江上氏のいくつかの論文に掲載されているが、圧倒的多数は未発表のものである。現在データベース化の作業が進められている。

[**インド・イスラム史跡調査関係資料**] デリーおよびインド各地に現存するサルタナット時代のムスリム遺跡に関する資料で、写真、実測図などが主なものである。1959年～62年度に「東京大学インド史跡調査団」が実施した現地調査の成果の一部である。『デリー：デリー諸王朝時代の建造物の研究』第1巻（1967）、第2巻（1969）、第3巻（1970）が刊行された。

[**西アジア考古資料**] 古代イラン文明の研究を目的として、1956年以来「東京大学イラン・イラク遺跡調査団」が両国における遺跡14か所を発掘・調査した結果、収集したもの。その数は数万点に達し、大部分は発掘品で、考古学上第一級資料である。1958年から1984年にかけて『イラク・イラン遺跡調査団報告』20冊が刊行されている。

3. 図書室の利用状況

これらの図書資料は広く内外の研究者に利用されている。2000年度と2001年度の図書室の利用状況は次の通りである。

区 分	閲覧者数			利用冊数		
	学 内	学 外	計	図 書	雑 誌	計
2000年度	2,338 (656)	2,069 (243)	4,407 (899)	17,293	9,490	26,783
2001年度	3,848 (692)	3,852 (299)	7,700 (991)	31,627	11,676	43,303

公開講座

本研究所では創立60周年にあたり、所属するアジア研究者が、従来、各自の専門分野において深化させてきた問題や、研究所の長い歴史の中で保持してきた知的ストックを、一般に向けて平易な形で伝えることを目的とする公開講座を始めた。2001年度第1回東洋文化研究所公開講座の題目は『アジアを知れば世界が見える—アジアの藝—』で開催状況は次の通りである。

2001年12月1日（土）13：00～16：30

画藝 ヨーロッパでも、日本でも、インドでもない、中国の絵画とは？

講師：小川裕充（東アジア第二研究部門教授）

工藝 絢爛たるイスラーム建築

講師：羽田 正（西アジア研究部門教授）

2001年12月2日（日）13：00～16：30

陶藝 焼き物の魚、アジアを泳ぐ—工藝と美の人類学・ことはじめ

講師：松井 健（汎アジア研究部門教授）

文藝 中国小説に学ぶ知恵

講師：大木 康（東アジア第二研究部門助教授）

VII 研究・教育活動

A 部門研究

汎アジア部門

原 洋之介	池本 幸生	高地 薫 (01年10月から)	猪口 孝
田中 明彦	山本 和也 (01年4月)	原田 至郎 (01年9月まで)	松井 健
菅 豊	関本 照夫	名和 克郎	岡本 サエ (01年3月まで)

汎アジア部門はアジアという対象を、経済学・政治学・人文地理学・文化人類学・比較思想という社会科学・人文科学の広い範囲にわたり、個別専門分野ならびに学際的な領域の理論と方法に深く関わりながら研究を深化させている。同時にこの部門ではアジアのアジア研究者とのネットワーキングにも力を注ぎ、アジア研究の地域的ハブとしての機能を担おうとしている。日本も重要な研究対象としている。

経済・統計研究分野は、アジア諸国経済発展の実証的な比較研究を通して、アジア諸国経済発展のアジア域内および世界における国際的位置づけを明らかにするとともに、欧米で提起・展開された経済発展論の再検討を試みている。国際政治分野では、アジアの国際政治の実証的・理論的な研究を精力的に行っている。人文地理学研究分野は、アジア諸地域におけるフィールドワークに基づいて、それぞれに異なる自然環境のなかでの人びとの生活の全体像を描くことを試み、その記述にかかわる理論研究を推進することを通してアジア地域の自然と文化の統合的全体を展望することを目標とする。文化人類学研究分野は、アジア諸地域の社会・文化の比較研究を目的とし、ミクロな地域社会の日常生活をフィールドワークの方法でつぶさに明らかにする方法を主に用いて、下からあるいは周縁から、よりマクロな社会の全体像を見透かそうとしている。比較思想研究分野は、東アジアの思想交流の中にみられる、漢字文化圏の諸民族の思惟的特徴を研究する。

アジア諸地域における社会・文化の変容過程

アジア諸社会の固有文化とその変容

関本 照夫 インドネシア社会の統合過程

名和 克郎 南アジアの集団関係とその変容

アジア諸国経済発展の比較研究

原 洋之介 アジア諸国の工業化と国際貿易

池本 幸生 アジアにおける所得分配

高地 薫 東南アジアの政治文化

アジアにおける政治変動と国際関係

猪口 孝 アジア太平洋における民主化と国際関係

田中 明彦 東アジアをめぐる主要国間の国際政治

原田 至郎 アジアにおける国際紛争

山本 和也 アジアにおける世界システムの接触・統合の分析

アジアにおける環境と生活文化

松井 健 西南アジアの生活文化

菅 豊 東アジアの生活文化

アジアにおける思想・文化の比較研究

岡本 サエ 東アジアの比較思想

東アジア部門（第一）

平勢 隆郎

黒田 明伸

濱下 武志

宮嶋 博史

(02年3月まで)

(02年4月まで)

高見澤 磨

甘 懐真

吉開 将人

陶安あんど

(00年8月まで)

(01年3月まで)

(01年3月まで)

東アジア第一部門は、中国、朝鮮、日本、ときにはベトナムを含む東アジア世界を総体として取り上げ、社会科学、歴史科学的方法によって過去から現在に至る動態を把握することを目標とする。この研究では、とくに東アジア第二部門と協力して、学際的な地域研究による生きた全体像をめざすことは言うまでもない。研究分野としては、経済・社会、政治過程、歴史、考古を包含し、「東アジアにおける国家権力と社会経済構造」を研究課題として、共同研究を継続している。この部門では、「17世紀以降東アジア公私文書の総合的研究」（主任濱下）、「朝

鮮伝統社会の構造とその変容」(主任宮嶋)、「出土文献史料とその歴史的背景」(主任平勢)等の研究班を組織し、本学内外の協力を得、継続して研究をすすめている。

東アジアにおける国家権力と社会経済構造

平勢 隆郎	中国古代帝国の形成
黒田 明伸	中国近世・近代の経済と制度
宮嶋 博史	近代朝鮮の社会経済構造
濱下 武志	中国近代の経済発展
高見澤 磨	現代中国の法律と社会
甘 懐真	中国古代の礼と社会
吉開 将人	中国古代国家と手工業
陶安あんど	帝制期中国の法律と社会

東アジア部門(第二)

丘山 新	橋本 秀美	尾崎 文昭	大木 康 (01年4月から)
小川 裕充	張 欣 (02年3月まで)		

東アジア第二部門は、中国を中心とする東アジア地域の思想、宗教、文学、美術を研究対象とする部門である。部門研究としては「庶民文化の形成と展開」を課題としている。

一般に中国では、権力エリートと文化エリートとは分離せずに癒着しており、したがって権力エリートは文化を独占して、庶民は非文化的階層とみなされてきた。しかし、庶民は文化獲得の努力をくり返して行い、権力エリートの文化とは異質な「庶民文化」を生み出した。それは権力エリートからは非正統的な文化とみなされ、強く意識されなかったにせよ反権力的指向をもっていた。「庶民文化」は六朝から唐末までに形成され、宋元以後にめざましく発展し、各地方に広がっていたと考えられる。

この課題に対して、各研究分野で独自の検討をするとともに、共同してその解明をめざしている。

東アジアにおける庶民文化の形成と展開

丘山 新	仏教經典の民衆化
橋本 秀美	職業としての經学
尾崎 文昭	近現代中国における小説の認識
大木 康	明代の庶民文化
小川 裕充	明清の職業画家
張 欣	東アジア世界の華人文学

南アジア部門

加納 啓良	高橋 昭雄	柳澤 悠	中里 成章
上村 勝彦	永ノ尾信悟	片岡 啓 (01年4月から)	柴崎 麻穂 (01年3月まで)
大石 高志 (02年3月まで)	久米 高史 (02年4月から)		

南アジア部門は、インド亜大陸を中心とする狭義の南アジア地域とともに東南アジア地域をも研究の対象にしている。この地域は多様な言語と文化をもつ人々が複雑な社会を形成しているうえ、大部分の国々が欧米の植民地支配を経験し第二次大戦後に独立を勝ち取ったという歴史的経験をもっており、こうした事情の理解なしには現状の把握も不可能である。このため、本部門は政治・経済・社会・文化などの広範な分野にわたってこの地域の過去と現在を探求することを共通の課題としている。

この見地から本部門では、インド亜大陸と東南アジアの双方にまたがる「環ベンガル湾地域における文化・文明の交錯」というテーマにもとづく研究を進めてきた。このため年に数回、部門の構成員が参加して、このテーマのもとに部門研究会を開催している。さらに、より特化した分野についての分析を深めるために、所外の研究者の協力を得て複数の研究班を組織し、それぞれ新しい角度から問題を提起して理論と実証の双方からの検討を行っている。

環ベンガル湾地域における文化・文明の交錯

永ノ尾信悟 古代インド社会と祭式

上村 勝彦	古代インドの文学と社会
片岡 啓	古代インドにおける思想の展開
柳澤 悠	近現代インドの経済構造
中里 成章	インドにおける植民地支配体制と社会構造
加納 啓良	東南アジアの植民地支配と社会経済構造
高橋 昭雄	市場体制移行下のミャンマー農村経済
柴崎 麻穂	東南アジアにおけるインド伝説文学の受容と変容
大石 高志	在日インド商人とインドのマッチ産業
久米 高史	精糖業におけるアジア国際競争

西アジア部門

鈴木 董	長澤 榮治 (02年3月まで)	羽田 正	樹屋 友子
後藤 明 (02年3月まで)	鎌田 繁	森本 一夫 (01年3月まで)	

西アジア部門は、アフガニスタンからトルコ・エジプトまでの地域、いわゆる中近東を研究対象とし、あわせて内陸アジアをも対象のなかに包含する。この広大な地域の政治、経済、文化、社会を、学際的研究によって総合的に理解し、その特質を解明することが本部門の目的である。そのために各自が独自の立場から個人研究を行うとともに、「西アジア文化の歴史的形成と現代的課題」を共通の研究題目とする共同研究が実施されている。

西アジア文化の歴史的形成と現代的課題

鈴木 董	オスマン帝国の政治社会史的研究
長澤 榮治	近現代アラブの社会経済史研究
羽田 正	イラン・イスラム社会の特徴
樹屋 友子	イスラーム地域における美術と社会
後藤 明	初期イスラム社会史
鎌田 繁	イスラム神秘思想の構造と展開
森本 一夫	イスラム世界における聖性の研究

東洋学研究情報センター

長澤 榮治
(02年4月から)
大田 省一
(02年4月から)

板倉 聖哲
深見奈緒子
(01年3月まで)

濱下 武志
(02年4月から)
井手誠之輔
(02年3月まで)

高島 淳
(02年5月から)
鈴木 隆泰

アジア資料学の構築

長澤 榮治	近現代アラブの社会経済史研究
板倉 聖哲	東アジア造形資料の研究
濱下 武志	東アジア文献資料の研究
高島 淳	サンスクリット文献データベースの手法の研究
大田 省一	近代アジア建築の比較史的研究
深見奈緒子	イスラーム建築写真資料の研究
井手誠之輔	東アジア絵画の画像分析の手法の研究
鈴木 隆泰	アジア哲学宗教文献資料の研究

B プロジェクト研究

先端地域研究プログラム「東南アジアを結節点とする域際アジア交易・交流と移民社会の役割」

東南アジアを経由する人、物、貨幣、文化の域際的移動・交流と、その媒体としての移民社会（華人系、インド系、アラブ系など）の役割、さらに域際交流が近現代のアジア各地域社会の内部構造に与えた影響を、多角的に解明する。

責任者 加納啓良・池本幸生

小川 裕充 黒田 明伸 田中 明彦 長澤 榮治
羽田 正 濱下 武志 高橋 昭雄 柳澤 悠

新分野開拓研究プログラム「アジア諸文化間の多元的共生を求めて——過去から未来へ」

西欧文明との意識的・無意識的対峙という共通の近代化経験をもとに、伝統的基層文化をふまえて、アジア的な積極的多文化共生の条件と可能性を、思想・宗教、倫理、美学から社会的・政治経済的研究までをも包み込んで探るものである。

責任者 尾崎 文昭・関本 照夫

猪口 孝 永ノ尾信悟 丘山 新 鎌田 繁
上村 勝彦 名和 克郎 橋本 秀美 平勢 隆郎

広域連携研究プログラム「アジア的人間——環境系モデルの構築とその実践的検討」

人間活動と環境変化との間の連鎖に関して、アジアにみられる特性を現地研究を通して析出し、「人間-環境系」としてモデル化する。このモデルを基盤として、持続的開発に関する実践的方策を模索する。

責任者 原 洋之介・松井 健

資料情報研究プログラム「アジア諸社会におけるエリートのネットワークと文化表象——比較研究の試み」

近世から近代にかけてのアジア諸社会のエリートの比較研究を、彼らが形成したネットワークのあり方と、彼らが生産した文化表象の様態の二点に着目して行い、アジアのエリートの性格について新しい視点を構築することを目的とする。

責任者 中里 成章・鈴木 董

板倉 聖哲 大木 康 梶屋 友子

C 長期国際共同研究 (2001年度で終了)

中国社会の変動が及ぼすアジア諸国への影響の研究

香港大学アジア研究センターと共同で、5年間にわたり香港研究プロジェクトならびにアジア研究ネットワーク形成プロジェクトとしてすすめられている。

(○は研究担当者、*は学外の研究協力者)

委員長 濱下 武志

宮崎 博史	平勢 隆郎	高見澤 磨	*吉開 将人
*青木 敦	*黨 武彦	黒田 明伸	*弘末 雅士
*金 鳳 珍	*菅谷 成子	*飯島 涉	○谷垣真理子
尾崎 文昭	大木 康 (01年4月から)	小川 裕充	丘山 新
*笠井 直美	加納 啓良	高橋 昭雄	*重松 伸司 (01年3月まで)
鈴木 董	岡本 サエ (01年3月まで)	原 洋之介	田中 明彦
○原田 至郎	*廖 赤 陽	板倉 聖哲	*陶安あんど
*張 欣	○山本 和也 (01年4月から)	*C. A. Daniels	

激動するイスラーム圏の政治・社会構造の変容過程の研究

国立民族学博物館地域研究センターと連携し同センターとの共同の下にプロジェクトを遂行している。

委員長 鈴木 董

平勢 隆郎	*黨 武彦	丘山 新	上村 勝彦
柳澤 悠	加納 啓良	永ノ尾信悟	後藤 明
鎌田 繁	羽田 正	榎屋 友子	長澤 榮治
*森本 一夫	*山中由里子	*小泉 龍人	*清水 和宏
*松原 正毅	*小杉 泰	*木村 喜博	*黒田 卓
○柳橋 博之	*白杵 陽	*M. Sadria	*中田 考
*菊地 達也	原 洋之介	関本 照夫	松井 健

環ベンガル湾地域における社会・経済・文化の交錯と変動

ベンガル湾を取り巻く南アジアから東南アジアにかけての一带を、独自の連関を持つ地域としてとらえ、地域内の社会・経済・文化の交錯と変動を考察する。

委員長 加納 啓良

高橋 昭雄	柳澤 悠	中里 成章	○井坂 理穂
上村 勝彦	永ノ尾信悟	*川島 耕司	*斎藤 照子
*青山 亨	原 洋之介	猪口 孝	田中 明彦
○原田 至郎	松井 健	関本 照夫	岡本 サエ (01年3月まで)
池本 幸生	*安藤 充		

D 班研究

各専門分野の研究を推進し所外の研究者との交流を深めるため、所員を主任とする班研究会が特定のテーマごとに数多く設置されている。所外の参加者には東京大学の他部局に属する「研究担当者」と、その他の教育・研究機関に属する「研究協力者」の双方が含まれる。1999、2000両年度における班研究会の組織状況は、次のとおりである。(○は研究担当者、*は研究協力者。途中で所属先が変わった者については、変更後の所属先にもとづいて分類。)

アジアにおける地域工芸産業の研究 主任 関本 (2000年度で終了)

アジア各地における染・織その他の地場工芸産業の幾つかの代表的事例を、文化人類学、経済学、美術工芸の視点をあわせて研究し、その現状、歴史的背景、今後の発展の可能性を知ろうとするものである。

関本 照夫 松井 健 高橋 昭雄 池本 幸生
名和 克郎 ○山下 晋司 *小笠原小枝 *塩田 光喜
*伊藤ふさ美 *林 行夫 *中谷 文美 *水野 広祐

アジア染織業に見る地域のアイデンティティと国際ネットワーク

主任 関本 (2001年度から発足)

アジア各地における染・織その他の地場工芸産業の幾つかの代表的事例を、文化人類学、経済学、美術工芸の視点を合わせて研究し、その現状、歴史的背景、今後の発展の可能性を知ろうとするものである。

関本 照夫 松井 健 池本 幸生 高橋 昭雄
名和 克郎 *伊藤ふさ美 *中谷 文美 ○山下 晋司
*塩田 光喜 *小笠原小枝 *林 行夫 *上田 曜子
*田口 理恵 *杉本 星子

南アジア北部における人類学的研究の再検討 主任 名和 (2002年度から)

1990年代の政治的経済的変動と人類学に対する根底的疑問の中で飛躍的に進展した日本語で書かれた南アジア北部の人類学的研究をそれぞれの調査をふまえて再検討し、今後の研究の方向性を打ち出すことを目標とする。

名和 克郎 *石井 溥 *上杉 妙子 *佐藤 齊華
*森本 泉 *安野 早己

自然資源の領有と利用の比較社会誌 主任 松井

土地をはじめとする自然資源が地域社会においてどのように領有(占有, 所有)されているか、また、実際どのように利用(占有, 活用)されているのかを比較する。自然資源をめぐる社会的諸制度が、そのなかの社会編成とどのようにからみあっているのか、その見取図をつくりたい。

松井 健 永ノ尾信悟 菅 豊 *小長谷有紀
*須藤 健一 *篠原 徹 *武田 淳 *菅原 和孝
*西谷 大 *窪田 幸子 *高倉 浩樹 *河合 香吏
*野林 厚志

構造調整下のアジア経済の展望 主任 原 (2000年度で終了)

アジア地域全体で展開されている経済の構造調整政策ならびに市場経済への移行について、その成果・問題点を比較の視点から解明している。

原 洋之介 池本 幸生 *杉本 義行 *今岡日出紀
○藤田 夏樹 *新谷 正彦 ○永田 信 *福井 清一
*石田 正昭 *本台 進 ○田嶋 俊雄

インドシナ3国移行経済圏の研究 主任 原 (2001年度から発足)

インドシナ諸国は今、社会主義経済から市場経済への移行と同時にグローバル

経済に急速に統合されつつある。この研究の目的は、市場経済の発達という視点から、この地域経済を多面的に検討することである。

原 洋之介 池本 幸生 ○泉田 洋一 *上田 曜子
*大野 昭彦 ○桜井由躬雄 *新谷 正彦 ○田嶋 俊雄
*堂本 健二 *福井 清一 ○藤田 夏樹 *首藤 久人
(01年度まで) (02年度から)

アジア太平洋諸国における日本外交 主任 猪口

アジア太平洋諸国は大きな変動を経験している。本研究計画は日本のアジア外交の実証研究を目指すものである。地球政治の枠組み、東アジア地域、東南アジア地域、日米関係などを分担しつつも、全体像を浮かび上がらせるような研究運営を図っていきたい。

猪口 孝 田中 明彦 ○原田 至郎 ○山本 吉宣
○山影 進 ○石井 明 ○古城 佳子

東アジア・東南アジアをめぐる主要国間の国際政治 主任 田中

東アジアの国際政治の分析として、各国の対外政策決定過程を比較分析するための作業を行うとともに、冷戦後の北東アジアをめぐる日米中関係の展開、朝鮮半島情勢の分析を行った。

田中 明彦 ○山影 進 *浅野 亮 ○古田 元夫
*伊豆見 元 *瀬島 誠 ○谷垣真理子 *今村 弘子
○原田 至郎

世界システムの諸類型 主任 田中

世界史上に存在したさまざまな世界システムの特徴を比較分析するための作業を続けている。近代世界システムとヨーロッパ中世の比較、古代中国、イスラム世界、アジア海洋世界などの比較を行うとともに、理論的検討も進めた。

田中 明彦 平勢 隆郎 濱下 武志 鈴木 董
上村 勝彦 ○原田 至郎 ○山本 和也
(01年度から)

アジア比較文化研究の基礎資料 主任 岡本 (2000年度で終了)

比較文化はその成立史から、かつては西欧資料について論じられることが多かったが、第2次大戦以降は特にアジア文化の多様性が強調されるようになった。しかしアジア比較文化の基礎資料が一堂に集められた解題集は、皆無に近い。そこでアジア比較文化の古典を数十点取り上げ、解題集を作ることに集中している。

岡本 サエ *加藤 祐三 *田辺 勝美 *小宮 彰
*西原 大輔 ○佐藤 慎一 ○川原 秀城 *吉田 忠
*清水 学 鈴木 董

中国出土文字史料とその歴史的背景 主任 平勢

各自がそれぞれのテーマで検討を進めるほか、出土史料と伝存史料との関わりを地道に探る作業をつづけている。伝存史料のうち左伝については一定の成果が得られたので、このことのもつ意味をさらに探る作業に着手し、江戸時代の左伝関係書の検討を始めた。

平勢 隆郎 *竹内 康浩 *原 宗子 *影山 輝国
*鶴間 和幸 *工藤 元男 *谷 豊信 *飯尾 秀幸
*吉開 将人 *熊谷 滋三 *近藤 浩之 *窪添 慶文
甘 懐真 *池田 知正
(00年度まで) (01年度から)

内蒙古出土学術資料の調査研究 主任 後藤 (2001年度で終了)

江上波夫名誉教授が戦前に内蒙古で発掘・収集した学術資料を点検し、その目録を作成することを目的としている。オロン・スム出土資料1866点、百靈廟凹地墳墓出土資料45点の画像とデータの点検・整理が完了した。

後藤 明 平勢 隆郎 *吉開 将人 *林 俊雄
*高濱 秀 *中見 立夫

漢籍 版本と分類の研究 主任 橋本 (2001年度から発足)

近年影印或いは排印で出版される中文古籍は、過去に例を見ない膨大な量にのぼる。これらを如何に選別して購入し、旧来からの資料と合わせて最も有効に活用できるように整理するか、具体的な処理法を検討している。

橋本 秀美 濱下 武志 高見澤 磨 宮嵜 博史
黒田 明伸 平勢 隆郎 丘山 新 尾崎 文昭
小川 裕充 板倉 聖哲 大木 康 ○川原 秀城
○小島 毅 ○大西 克也 ○村田雄二郎 ○黒住 真
*陳 捷 *梶浦 晋

中国禅宗語録の研究 主任 丘山

中国各分野の研究者の協力を得て、中国初期禅宗史書である『祖堂集』の会読をすすめ、訳注を『東洋文化研究所紀要』に順次掲載中。2002年度には『東洋文化』で特集号『中国禅思想研究』を刊行予定。

丘山 新 橋本 秀美 *神塚 淑子 *小川 隆
*衣川 賢次 *松原 朗 *土屋 昌明 *石井 修道
*石井 清純 ○末木文美士 鈴木 隆泰 *前川 亨
*許山 秀紀 *大西 龍峯 *高堂 晃寿
(01年度から) (01年度から) (02年度から)

1980-90年代中国の思想・文化・学術 主任 尾崎

中国の1980-90年代は、文化全般の大変革期であったが、その構造的変革の様相とその意味をとらえるべく、思想・文学・社会史学・法学などの各分野の研究者によりイデオロギー分析などの方法による研究を進める。

尾崎 文昭 大木 康 丘山 新 高見澤 磨
○大西 克也 *蔽 鋒 *坂井 洋史 *坂元ひろ子
*砂山 幸雄 ○戸倉 英美 *張 欣 ○村田雄二郎
*茂木 敏夫 *上田 望 *笠井 直美 *廣瀬 玲子
(00年度まで) (00年度まで) (00年度まで)

中国一九三〇年代の文学 主任 尾崎

1930年代を中心にしつつ、広く中国現代文学の実証的な研究を目的とし、雑誌『現代』の輪読を軸に研究報告会、合宿などを行う。また、世界の同分野の研究者との研究交流も積極的に行う。

尾崎 文昭 * 芦田 肇 ○ 伊藤 徳也 * 大滝 幸子
(01年度まで)
○ 刈間 文俊 * 近藤 龍哉 ○ 櫻庭ゆみ子 * 佐治 俊彦
(00年度まで)
* 清水賢一郎 * 白水 紀子 ○ 代田 智明 * 陳 捷
(01年度まで)
○ 藤井 省三 * 松岡 俊裕

17世紀以降東アジア公私文書の総合的研究 主任 濱下

東洋文化研究所が所蔵する仁井田陞博士コレクションの土地契約文書の解読研究から出発した本研究班は、その後東洋学文献センター叢刊などにおいて解題・目録を作成した。その他商業文書、日用文書などを継続的に研究する。

濱下 武志 高見澤 磨 * 青木 敦 * 黨 武彦
○ 岸本 美緒 * 上田 信 * 寺田 浩明 * 張 士 陽
* 臼井佐知子 * Linda Grove * 久保 亨 宮嶋 博史
○ 石川 洋 * 川村 康 黒田 明伸 * 金田 真滋
* 廖 赤陽 * 中島 楽章
(01年度から)

中国法研究における固有法史研究、近代法史研究及び現代法研究の総合の試み 主任 高見澤

従来、中国法研究においては、清末までの固有法史研究と1949年以降の現代法研究との対話は十分ではなく、また、蓄積のあるこの両者に比し、近代法史研究が手薄であった。本研究班においては、固有法史研究、近代法史研究、現代法研究の三者を対話させ、「中国法」研究を行うことの可能性を探る。

高見澤 磨 ○ ポールチェン ○ 松原健太郎 * 陶安あんど
* 中村 正人 ○ 西 英明 * 川村 康
(01年度から) (01年度から)

現存する中国絵画の包括的再検討 主任 小川

本班は、東アジア美術研究室所蔵中国絵画写真資料を維持・拡大させるため、世界の公私の中国絵画コレクションの調査撮影を実行する母胎をなす。現在、第二次包括的調査の成果を承けて、『中国絵画総合図録 続編』の刊行を終え、既に第三次調査を開始している。

小川 裕充 板倉 聖哲 *嶋田 英誠 *湊 信幸
*宮崎 法子 *藤田 伸也 *救仁郷秀明 *井手誠之輔
*林 秀 葢 *西上 実 *伊藤 大輔 *増記 隆介
(01年度まで) (02年度から) (02年度から) (02年度から)
*竹浪 遠
(02年度から)

朝鮮伝統社会の構造とその変容——方法論的探究 主任 宮嶋

近現代の朝鮮社会の個性的展開を、伝統社会の構造とその変容という視点から把握することを目指している。

宮嶋 博史 ○吉田 光男 ○小川 晴久 *山内 弘一
*吉野 誠 *趙 景 達 *月脚 達彦 *康 成 銀
*尹 健 次 *並木 真人

植民地期南アジア像の再検討——経済と政治 主任 柳澤

植民地期の南アジアの経済と政治に関する過去 20年間の研究の進展は目ざましく、従来の認識を大幅に変更するものとなっている。人口史・飢饉史や環境史などの研究も急速に進展してきた。本研究会は、これらの新たな研究動向の展開を整理して、植民地期の政治経済像の再構成を追求する。

柳澤 悠 ○水島 司 *栗屋 利江 ○井坂 理穂
*山本由美子 *竹中 千春 *佐藤 宏 *脇村 孝平
*大石 高志 *太田 信宏 *井上あえか
(01年度) (02年度から)

南アジアのヒストリオグラフィ 主任 中里 (2002年度から)

サバルタン・スタディズの登場から20年、南アジア近現代史研究のパラダイムは大きく転換した。ジェンダー研究、ポストコロニアル批評等の最近の研究動向を総括し、今後進むべき道を探る。

中里 成章 ○粟谷 利江 ○井坂 里穂 *大石 高志
*太田 信宏 *押川 文子 *竹中 千春 *野村 親義
*脇村 孝平

南アジアにおける経済発展と国民形成 (1930年-1990年)

主任 中里 (2001年度まで)

最近のインド経済自由化への急激な動きは、南アジアの経済と政治がかつてない転換期にたたさされていることを示している。本班研究は、独立前の模索の段階を経て、独立後独特のかたちで発展を遂げた南アジアの国民経済と国民国家のシステムにいかなる問題があったのか、今日の視点から検討を加える。

中里 成章 *押川 文子 *黒崎 卓 *近藤 則夫
*藤井 毅 ○藤田 幸一 *脇村 孝平

インド古代叙事詩の研究 主任 上村

ヒンドゥー教を研究する上で最も基本的な資料である二大叙事詩『マハーバーラタ』と『ラーマーヤナ』を中心に、古代インドから近代インドに至るまでのインドの思想、宗教、文化を通観することを目的とする。そのために、ヴェーダ、仏教、法典、美術建築、宗教儀礼、ヒンディー文学の研究者の協力を得る。

上村 勝彦 永ノ尾信悟 ○土田龍太郎 ○高橋 孝信
○入山 淳子 *松原 光法 *渡瀬 信之 *金 漢 益
*戸田 裕久 *ルイス麻穂 *水野 善文
(01年度から)

南アジアとイスラーム 主任 永ノ尾 (2001年度で終了)

現代の南アジアの社会、文化を理解するためには、南アジアにおけるイスラームの歴史のかかわりを度外視することはできない。南アジアの古代から続く伝統的文化との交渉を中心に、南アジアにおけるイスラームの独自性を歴史的観点から総合的に研究する。

永ノ尾信悟 *石井 溥 鎌田 繁 *関根 康正
中里 成章 羽田 正 松井 健 柳澤 悠
山下 博司 *榊 和良 片岡 啓
(01年度から)

イスラームと接触後の南アジアの諸宗教の動き 主任 永ノ尾 (2002年度から発刊)

六、七世紀以降南アジアの宗教においてタントラ化という動きがヒンドゥー教、仏教、ジャイナ教を含めて進行した。十二世紀頃からこの動きに南アジアのイスラームのスーフィズムも関わってきた。タントラ化とは何か、それぞれの宗教がどのように反応したのかに関する比較研究を行う。

永ノ尾信悟 鎌田 繁 羽田 正 片岡 啓
○斎藤 明 *高島 淳 *引田 弘道 *島 岩
*森 雅秀 *田中 公正 *榊 和良

東南アジア近現代史像の再検討 主任 加納

欧米植民地支配のもとでの変容、独立後の国民国家形成、インドシナ、ビルマにおける社会主義の実験、ASEAN 諸国を中心とする経済発展などを経て東南アジアの社会は大きく変わる一方、1997年からの金融危機はその弱点をも示した。こうした経過を踏まえ、この地域の近現代史像の再検討を続けている。

加納 啓良 *浅見 靖仁 *小泉 順子 ○桜井由躬雄
*白石 昌也 ○末廣 昭 高橋 昭雄 *土佐 弘之
○中西 徹 ○藤原 婦一 ○古田 元夫 高地 薫
(01年度から)
○山本 博之 *伊藤 正子 *岩槻 純一 *宮脇 聡史
(02年度から) (02年度から) (02年度から) (02年度から)

ミャンマー近現代史における「国」と「民」 主任 高橋

王朝の崩壊後、植民地、議会制民主主義、社会主義、そして軍政下の市場経済化と遷移してきた体制の中で、ミャンマーの農民、市民、諸民族、知識人らがこれにどのように対応し、またかかわってきたのかを総合的に研究する。

高橋 昭雄 *根本 敬 *工藤 年博 *谷 祐可子

アジア都市比較の課題と方法 主任 鈴木

アジア諸地域の都市の特質について、アジア専門家とアジア以外の地域の専門家の協力により、解明を加えることをめざし、研究会を持つこととしている。

鈴木 董 *陣内 秀信 松井 健 *妹尾 達彦
大木 康 *清水 展 羽田 正 *坂本 勉
*林 佳世子 大田 省一 *黒木 英充 ○本村 凌二
(02年度から)
*小泉 龍人
(02年度から)

近代アジア社会研究の方法的課題 主任 濱下

班員が研究対象とするアジア諸地域社会をその内的構成において検討すること、またそれらの近代という問題へのかかわり方を様々な角度から討論し、さらに地域間で比較検討を行い、アジア社会研究の方法的課題を明らかにする。

濱下 武志 宮脇 博史 柳澤 悠 鈴木 董
加納 啓良 原 洋之介 中里 成章

ジャーヒリーヤからイスラームへ 主任 後藤 (01年度で終了)

内外の研究者を招いての研究会での発表などを通して、中東地域におけるイスラーム以前からイスラーム後の時代への変化を、政治、経済、社会、思想、文学など多様な側面から検討する。また、イブン・イスハーク著、イブン・ヒシャーム編『預言者伝』の翻訳を、共同作業として実施している。

後藤 明 ○ 薮 勇造 * 花田 宇秋 * 佐々木淑子
* 青柳かおる * 医王 秀行
(01年度) (01年度)

比較イスラム制度史の研究 主任 鈴木

前近代イスラム世界の諸制度の形成・伝播・発展について、政治制度を中心に比較史的検討を行うことをめざしている。

鈴木 董 * 花田 宇秋 ○ 佐藤 次高 * 三浦 徹
* 私市 正年 * 林 佳世子 羽田 正

都市社会と宗教施設 主任 羽田

イスラム世界の都市においては、モスク、マドラサ、聖廟などの宗教施設が社会的に重要な意味を持っている。本班研究は、イスラム世界内外の都市史や建築史の専門家の共同討議によって、これら宗教施設の社会的機能を解明することを目的としている。

羽田 正 ○ 藤井 恵介 * 私市 正年 ○ 小松 久男
* M. Sadria * 林 佳世子 * 三浦 徹 * 深見奈緒子
* 山中由里子 * 森本 一夫 榎屋 友子 大田 省一

欧文ペルシア旅行記の研究 主任 羽田

15世紀以来数多く記されてきた欧文によるペルシア旅行記に関する情報を集積し、その特徴を文献学的に解明するとともに、その記述を多角的に利用して、イラン社会の特徴やヨーロッパ社会とイスラム社会の相違などの問題を明らかにすることを旨とする。

羽田 正 * 近藤 信彰 * 山岸 智子 * 山中由里子
○ 山口 昭彦 榎屋 友子

中東の社会変容と思想運動 主任 長澤

東アラブを中心として、近代以降の中東の社会経済変容と政治社会思想との展開の相互の関係を、各地域の事例研究に依拠して比較考察する。

長澤 榮治 *池田美佐子 *臼杵 陽 *岡野内 正
(01年度から)
*加藤 博 *栗田 禎子 *福田 安志 *松本 弘

イスラム史料の総合的研究 主任 鈴木

イスラム圏の諸史料の史料学的検討をめざし、現在は、オスマン語史料につき、オスマン史以外の専門家も含めて、史料講読会をもち、史料学的検討を進めている。

鈴木 董 *坂本 勉 *八尾師 誠 羽田 正
*林 佳世子 *黒木 英充 *堀井 優 *加藤 博
*私市 正年 *三沢 伸生

イスラーム思想の文献学的研究 主任 鎌田

本研究所にはアラビア語を中心とする写本集成である「ダイバー・コレクション」が所蔵されているが、これら原資料やマイクロフィルムの資料を活用して、イスラームの幅広い思想を研究者のさまざまな関心に基づいて研究を進めることを目的としている。その一環として定期的に文献の講読を行っている。

鎌田 繁 後藤 明 *小林 春夫 ○佐藤 次高
(01年度まで)
○杉田 英明 ○竹下 政孝 *東長 靖 *中田 考
*野元 晋 *藤井 守男 *菊地 達也 *吉田 京子
(02年度から)

インターネット利用技術 主任 岡本 (2000年度で終了)

インターネットにおける中国書データベース、安全な利用環境のためのセキュリティ関連技術、マルチメディア・コンテンツの利用などのインターネット利用

技術に関して、研究発表や情報交換を行った。

岡本 サエ 板倉 聖哲 ○大木 康 *大塚 秀高
*梶浦 晋 加納 啓良 *官 寧 鈴木 隆泰
田中 明彦 *二階堂善弘 原田 至郎 *檜垣 泰彦
平勢 隆郎 *安田 聖 *山田 直子

東アジア文献資料学の課題と方法 主編 宮嶋

近年膨大に拡大しつつある東アジアの文献情報を含めて、資料蓄積の新たな方策を探る。

宮嶋 博史 濱下 武志 高見澤 磨 黒田 明伸
平勢 隆郎 丘山 新 尾崎 文昭 鈴木 董
永ノ尾信悟

南アジア文献資料学の課題と方法 主編 永ノ尾

南アジアにはさまざまな言語で伝承されてきたさまざまな文献資料が存在する。それらの文献資料を網羅的に収集し、整理分析し、南アジアの社会、文化の研究に基礎資料として提供できるようにするためには、いかなる方策を講じる必要があるかを、総合的に検討する。

永ノ尾信悟 中里 成章 柳澤 悠 上村 勝彦
加納 啓良 高橋 昭雄 鈴木 董 宮嶋 博史

西アジア文献資料学の課題と方法 主編 鈴木

西アジアには、イスラム時代のみをとっても、アラビア語、ペルシャ語、トルコ語を中心に、様々のタイプの文献資料が存在する。これら文献資料の資料学的検討と、その収集・利用・保存等につき多面的に検討することをめざす。

鈴木 董 長澤 榮治 羽田 正 後藤 明
鎌田 繁 宮嶋 博史 永ノ尾信悟
(01年度まで)

アジア土地関係資料の比較研究 主任 宮嶋

アジア各地域の土地台帳・地稅徴収簿・土地売買文書などのあり方を比較し、社会編成の特質を展望することを目指している。

宮嶋 博史 ○岸本 美緒 ○杉本 史子 *齋藤 照子
高橋 昭雄 中里 成章 *三沢 伸生

東アジアの家系記録（宗譜・族譜・家譜）に関する総合的比較研究

主任 宮嶋

東アジア社会の歴史と現実において重要な意味を有する父系血縁集団の記録である族譜（宗譜・家譜）について、その時期別作成状況、体裁、現存状況などを総合的に比較検討する。

宮嶋 博史 *瀬川 昌久 *上田 信 *嶋 陸奥彦
*中西 裕二 *豊美山和行 *森本 一夫

仏教美術に関する資料収集と比較研究 主任 板倉

日本に現存する中国絵画の内、仏教絵画を中心にして宗教画が非常に重要な位置を占めている。これらは中国絵画の主流のみからは理解し得ないものであり、むしろ、日本の中でいかに受容されてきたかという視点と合わせて双方からの検討が必要である。本班研究は、様々な文物を対象として受容・理解における共有との差異の相を明らかにするための共同作業である。

板倉 聖哲 *内藤 榮 *伊東 哲夫 *稲本 泰生
*高橋 範子 *高橋 照彦 丘山 新 *井手誠之輔
(01年度から)

E 定例研究会

本研究所では、毎年5～6回の頻度で、研究所スタッフ全員の参加する定例研究会を開催している。5つの研究部門と3つの長期研究プロジェクトの各々が輪番制により毎年1回、部門構成員のいずれか1名の研究報告をこの研究会で行うのが慣例となっている。また毎年度末には、定年退官する教官の最終研究発表会を開催している。過去2年間の開催状況は次のとおりである。

2000年度

開催月日	担当部門	報告者	研究発表論題
6月22日	汎アジア	菅 豊	動物利用からみた中国漢人の自然観
7月13日	東アジア1	甘 懐真	中国古代国家の祭祀制度から見た皇帝の宗教的性格
9月28日	汎アジア	名和 克郎	文明周縁部における「宗教」の現在——ネパール、ビヤンス地方の状況を事例に
11月2日	東アジア2	橋本 秀美	〈義礼疏〉版本の話
12月7日	東洋学研究情報センター	深見奈緒子	インド・イスラーム建築史再考

2000年度退官記念最終研究発表会

3月8日	岡本 サエ	東西出版交流が語る比較思想
------	-------	---------------

2001年度

開催月日	担当部門	報告者	研究発表論題
6月7日	東アジア2	大木 康	明末清初の南京秦淮
7月12日	南アジア	片岡 啓	古典インド聖典解釈学派による全知者批判

10月18日 東アジア2 張 欣 アメリカにおける華人文学の諸相
と華人アイデンティティ

11月8日 汎アジア 山本 和也 社会科学とコンピュータ・シミュ
レーション

2001年度退官記念最終発表研究会

3月7日 後藤 明 ムハンマド伝再考

2002年度退官記念最終研究発表会

4月25日 宮嶋 博史 朝鮮の族譜について

F 学術研究・調査

1. 特別事業費等による海外現地研究

鎌田 繁 (2000. 8. 20～2001. 6. 19) : 文部省在外研究員旅費

米国において、イスラーム神秘思想の文献学的研究。

原田至郎 (2000. 9. 1～2001. 3. 1) : 文部省在外研究員旅費

南カリフォルニア大学の客員研究員として、シミュレーションによる紛争研究に役立つ種々のデータや手法、様々な先行研究について情報収集を行った。

板倉聖哲 (2001. 11. 15～2002. 9. 25) : 文部科学省在外研究員旅費

日本に伝存する南宋時代院体画の質の高さを世界中の研究者の認めるところであるが、日本・米国・中国・台湾に分蔵される現存作品を調査・比較を行うことで新たな座標軸を構築し、ヴィジュアル・カルチャー総体の視点から単純化に向かうとされる南宋時代院体山水画の再検討を行う。

羽田 正 (2002. 3. 15～2003. 1. 12) : 文部科学省在外研究員旅費

英国、イラン、インド洋海域港町における異文化交流の研究。

菅 豊 (2001. 1. 9～1. 15) : 特別事業費

中国上海、台湾においてストリート・ベンダーと動植物売買に関する資料収集および調査を行った。

板倉聖哲 (2001. 3. 6～3. 30) : 特別事業費

米国・中国において特別展及び作品調査を行った。

池本幸生 (2001. 3. 15～3. 29) : 特別事業費

香港返還によって引き起こされた大陸部東南アジアの経済変動に関する調査を行った。

柳澤 悠 (2001. 12. 2～12. 14) : 特別事業費

2001年12月2日より約2週間、インド・デリーのインド国立史料館にて、独立前のインドと東南アジアとの交易関係や農村工業に関する資料の収集を行った。

加納啓良 (2002. 1. 6～1. 17) : 特別事業費

2002年1月にインドネシアとシンガポールを訪れ、インドネシア大学日本研究センターおよびシンガポール国立大学芸術・社会科学部と研究協力についての打ち合わせを行った。

小川裕充 (2002. 1. 13～1. 17) : 特別事業費

シンガポールにおける美術館制度の概括的調査と資料収集、シンガポール国立大学研究交流訪問を行った。

大田省一 (2002. 1. 13～1. 17) : 特別事業費

シンガポールにおいて、「美術に即した文化的・国家的自己同一性の追求・形成の研究」の建築班担当として調査・研究協議を行った。

片岡 啓 (2002. 2. 23～3. 14) : 特別事業費

ネパール・カトマンドゥの公文書館にて NGMPP 蒐集のサンスクリット写本を調査、インド哲学・仏教文献のマイクロフィルム複製を依頼・購入した。

菅 豊 (2002. 2. 26～3. 1) : 特別事業費

中国上海においてストリート・ベンダーと動植物売買に関する資料収集および調査を行った。

尾崎 文昭 (2002. 3. 11～3. 18) : 特別事業費

1998年の香港返還にともなう海外華人の意識調査のために、香港中文大学・香港科学技術大学・香港浸会大学などを訪問し、インタビューなどを行った。

松井 健 (2002. 3. 15～3. 25) : 特別事業費

ラオスにおける生活変化と環境についての調査及び関係文献収集。

菅 豊 (2002. 3. 26～3. 29) : 特別事業費

中国広州においてストリート・ベンダーと動植物売買に関する資料収集および調査を行った。

橋本秀美 (2001. 1. 4～2. 8) : リーダーシップ支援経費

北京中華書局で王文錦先生と出版予定の《礼書通詁》の校訂作業を進めた。

名和克郎 (2001. 2. 21～3. 28) : リーダーシップ支援経費

ネパール極西部における言語使用と知識の分配に関する調査 調査地 : カトマンドゥ, ダルチュラ (ネパール)

丘山 新 (2001. 3. 10～3. 27) : リーダーシップ支援経費

連合王国, スペイン : 連合王国における漢籍のデータベース化の状況調査と意見交換, および中国仏教に関するシンポジウムで「仏典の漢訳の諸問題」で研究発表。

関守ゲイノー (2002. 3. 13～3. 31) : リーダーシップ支援経費

ロンドン大学アジア・アフリカ研究学院での資料収集・研究会参加, および英文雑誌刊行のための出版社との打ち合わせ。

柳澤 悠 (2002. 3. 17～3. 24) : リーダーシップ支援経費

英国図書館における資料収集, および英文雑誌刊行のための出版社との打ち合わせ。

中里成章 (2002. 3. 20～3. 31) : リーダーシップ支援経費

インド国立公文書館 (ニューデリー) で「19世紀のインド・エリートに関する資料調査」を行った。

キャスリーン・アッシャー (2000. 11. 15～11. 22) : リーダーシップ支援経費 (招聘)

東洋文化研究所講演会, センターセミナー発表のため

巖 鋒 (2001. 2. 1～2. 20) : リーダーシップ支援経費 (招聘)

1980-90年代中国文学の日本における受容と影響について共同研究

陳 平原 (2001. 11. 4～11. 9) : リーダーシップ支援経費 (招聘)

共同研究のため

イルハン・シャーヒン (2002. 1. 14～1. 20) : リーダーシップ支援経費 (招聘)

オスマン朝史共同研究

フェリドン・エメジェン (2002. 1. 14～1. 20) : リーダーシップ支援経費 (招聘)

オスマン朝史共同研究

シルビー・ドゥノワ (2002. 2. 27～3. 10) : リーダーシップ支援経費 (招聘)

近現代アラブ世界都市史に関する研究

スッサン・バーバーイー (2002. 3. 8～3. 17) : リーダーシップ支援経費 (招聘)

サファビー朝宮廷におけるグラームの役割についての講演会, 情報交換のため

甘 懐真 (2002. 3. 21～3. 25) : リーダーシップ支援経費 (招聘)

東洋文化研究所との学術交流 (鳥取県の古代遺跡に関する調査)

胡 平生 (2002. 3. 22～3. 26) : リーダーシップ支援経費 (招聘)

東洋文化研究所との学術交流 (中国現代史に関する講演のため)

ラガヤー・マット・ジン (2002. 3. 23～3. 31) : リーダーシップ支援経費 (招聘)

東・東南アジアの貧困問題と潜在能力アプローチに関する研究

2. リーダーシップ支援経費

橋本秀美「続修四庫全書」購入

《続修四庫全書》は、20世紀の最後を飾る最も基本的最も重要な漢籍影印大型叢書であり、およそ中国古代文化を研究する者にとっては不可欠のものだが、経常的予算の範囲では購入出来ないため、これまで全学に所蔵が無く、本学の学生・教員は他大学の図書館等に頼っていた。今後、日常的に最も頻繁な利用が予想されている。

2001年度 646.8万円

板倉聖哲

機材としては入力用にCD-ROMドライブ、作業用に端末など、出力用にプリンターなどを購入、それらをLANで結びつけ、既に稼働させている。素材として1000画像以上を選択した上でデジタル化し、画像データベースの基礎となる部分を作成した。これらの成果の一部は東洋学研究情報センターのホームページ上でアジア・デジタル展示館として公開中である。

2000年度485.1万円

宮嶋博史「朝鮮・韓国の族譜」

19-20世紀にかけて作成された全310種、1900冊余りの族譜で、既に本研究所で所蔵されているものと合わせて、500種余りから成る我が国最大の朝鮮族譜のコレクションとなった。

2001年度370万円

加納 啓良「田中則雄旧蔵書300冊」

主に植民地期のインドネシアの歴史に関するオランダ語文献500点余りから成るこのコレクションは、個人が収集した蔵書としては日本でも有数のものである。田中氏の引退に際し譲渡を受けて図書室に収蔵し目録を作成した。

2000年度670.2万円

3. 文部省科学研究費による研究・調査

猪口 孝「民主主義の機能不全の理論的実証的研究—アジア・ヨーロッパにおける価値・規範・民主主義の世論調査に基づく」: 特別推進研究

民主主義は20世紀第4半期にその数を急速に増加させたが、どのように機能しているかについてアジアとヨーロッパの18カ国で世論調査を行う。政治についての基本的感じ方、考え方を政治文化と呼ぶがそのなかでもidentity, trust, competitionに焦点をあて民主主義への期待や不安を草の根レベルで捉えたい。

2000年度13,000万円 2001年度1,200万円

柳澤 悠「南アジアにおける環境変動と開発」: 特定領域研究(A)(1)

特定領域研究「南アジア世界の構造変動とネットワーク」の第3班。

南アジアにおける環境や生態の変化を、経済開発との関連で考察する。とくに、

農業開発や畜産開発と環境変動との相互関係や人口や衛生と環境を、村落社会の構造的変動と関連させながら考察する。

2000年度 810万円

黒田明伸「貨幣・金融を中心とする近代世界システムにおけるインドと中国の比較」：特定領域研究（A）（2）

特定領域研究「南アジア世界の構造変動とネットワーク」の計画研究。

大英図書館、オックスフォード・インド研究所、ケンブリッジ大学図書館、国立公文書館、ロンドン政治経済学大学院図書館にてインドの貨幣と金融に関する資料を収集した。

2000年度 100万円

羽田 正「『シャーナーメ』の伝承とイラン人意識の形成」：特定領域研究（A）（2）

特定領域研究「古典学の再構築」の計画研究。

特定領域研究「古典学の再構築」の計画研究を構成する一つの計画研究として「シャーナーメの伝承とイラン人意識」という題目の研究を行った。

2000年度 250万円 2001年度 100万円

丘山 新「仏教における主要概念のインド・中国・日本における伝承と受容」：特定領域研究（A）（2）

特定領域研究「古典学の再構築」の計画研究。

仏教を資料に、主要概念がどのように翻訳され、いかに受容されていったかを探る。

2000年度 250万円 2001年度 380万円

平勢 隆郎「我国伝統中国学の独自性を発信するためのシステム開発」：基盤研究（A）（1）

本プロジェクトでは、我が国の伝統中国学の基礎を築いた江戸時代に焦点をあて、この時代に大きな影響を残した中国の明代・清代の学術情報を効果的に提供するためのシステム作りを目指している。

2001年度 1,340万円

長澤 榮治「アラビヤ文字圏近現代データベース形成の手法の研究」：基盤研究

(B) (1)

アラビア文字資料地域であるエジプト、トルコ、大シリア地域の議会議事録・官報・政府年鑑等、近現代政治社会分析の基礎資料に関するデータベース形成とその手法についての基礎研究を行う

2001年度 550万円

宮崎 博史「東アジア家系記録（宗譜・族譜・家譜）の総合的比較研究」：基盤研究 (B) (1)

一般に族譜と通称される東アジア各社会の家系記録について、現地調査と文献調査、歴史的視点と現代的関心という二つの方法、視覚から総合的に比較研究する。

2001年度 520万円

高橋 昭雄「風土と物産からみたベンガル湾世界の社会経済史的研究」：基盤研究 (B) (2)

南アジアから東南アジアにまたがる「環ベンガル湾世界」の近・現代社会経済史について、「風土と物産」「土地制度と農業変化」「交通・商業・金融のリンクエージ」などの主題を中心にデータ収集と比較研究を行う。

2000年度 170万円

鈴木 董「日本とトルコの近代化とその歴史的諸前提の比較研究」：基盤研究 (B) (2)

日本とトルコは、アジアの諸社会の中で、いずれも政治的独立を保ちつつ近代国民国家を形成した点で多くの類似点を有するとともに、文化的伝統と歴史的背景において大きな相違を示す。トルコ側と日本側の研究者の共同作業に基づき、日土の近代化の歴史的諸前提を新たな視点から比較しつつ解明することをめざす。

2000年度 360万円 2001年度 370万円

松井 健「アジア・オセアニア・アフリカ地域における自然とかわる文化的プラクシスの通文化的研究」：基盤研究 (C) (1)

アジア・オセアニア・アフリカ地域の人々が、自然とかわる文化を行く多様な行動やイデオロギーを文化的プラクシスとしてまとめて考察し、それらを比較するために、一年に数回二日間程度の研究会を開催し、一回三～五題の報告につ

いて徹底的に議論している。

2000年度 70万円

池本幸生「東南アジアの貧困問題と潜在能力アプローチに関する研究」：基盤研究(C)(1)

貧困を低所得として捉えようとする従来の貧困削減政策は人の福祉を正しく捉えることができず、人の福祉はむしろ悪化するという現象が起っている。この欠点を克服するために、アマルティア・センの潜在能力アプローチを応用する。

2000年度 150万円 2001年度 220万円

菅 豊「在地論理にもとづいた環境保全の民俗学的研究」：奨励研究(A)(2)

現代まで自然環境が適切に維持されてきた地域社会に存在する、在地の伝統的な技術や社会システムに注目し、そこから得られた知見が現代の環境保全にどのように寄与できるか、という問題について検討する。

2001年度 120万円

田中明彦「戦後日本政治・外交データベース」：研究成果公開促進費(データベース)

日本の内政・外交ならびに国際関係にかかわる重要な政治文書などの全文テキストをデータベース化し、インターネット上で公開すること。

(参照 <http://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/dababase/speech/>)。

2000年度 1,030万円 2001年度 850万円

丘山 新「東洋文化研究所所蔵漢籍目録データベース」：研究成果公開促進経費(データベース)

東洋文化研究所所蔵漢籍約5万点の目録データベース作成。本格的なものとしては、日本で最初のものとなる。

2000年度 1,950万円 2001年度 1,620万円

尾崎文昭「中国近現代文学関係雑誌目次データベース」：研究成果公開促進費(データベース)

中国近現代文学研究関係の中国発行研究誌の文献データベースを作成する。中国語文字でデータを入力し、本研究所のホームページで公開する。

2000年度 220万円 2001年度 210万円

4. その他の経費による研究・調査

加納啓良「a. 近郊社会の変容 b. 社会科学研究のための日本語・インドネシア語辞典編纂」：国際協力事業団現地業務費による研究

a. 日本とインドネシアの首都圏近郊社会変容過程の比較研究 b. 上記辞典に収録する日本語語彙の選定と翻訳

猪口 孝「E議員の研究—インターネットから見た議員活動（部会粘着から世論働きかけへ）」：サントリー文化財団

現在目前に展開している政治過程を、政治的選好の集約の方法のくみかえの一側面としてとらえることによって、族議員とE議員において組織化されたセクター利益の伸長・擁護と組織化されていない無定形な利益の形成・発展のせめぎあいの図式から、日本政治の新しい特徴をとらえようとする。

2000年度 100万円

猪口 孝「全面的日米協力に関する研究」：国際交流基金日米センター助成金

日米同盟は創設50周年を迎えたが、その理念は自由民主主義の擁護と自由市場経済の推進が中核である。そして、アジア太平洋地域のガバナンスとの関連性などを分析検討し、また、地域秩序のビジョンの中に位置付けられることが、日米同盟のさらなる強化と発展に寄与するという議論を展開している。

2000年度～2001年度 1,386万円

猪口 孝「日本政治における社会資本の歴史的事実的研究」：松下国際財団

社会資本は政治活動を支える社会インフラであり、歴史的に考察して初めて理解が深まる性質のものであるので、日本においてそれがどのような性格を持つものかを、とりわけイエ社会が発展し始めた徳川時代に注目して歴史的に実証的に追求しようとする。さらに、今日的な世論調査による分析とも比較する。

2000年度 80万円

猪口 孝「アジア太平洋地域の安全保障とガバナンスに関する研究」：米日財団

日本から7名、米国から6名が参加し、多彩な顔ぶれのもと、21世紀に向けての日米協力体制についての真摯な議論とその分析を行う。日米同盟50周年を迎え、日米両国の協力関係を促進し、双方にとって飛躍的な21世紀を向か

えるための準備として極めて重要な意味を持つものである。

2000年度～2001年度 1,815万円

原 洋之介「韓国日本近代化の比較」：韓国学術振興財団

東アジア地域の中で、経済開発の面でおおきな成果を達成してきた韓国と日本の近代化の歴史過程を、両国の研究者を組織して、伝統社会の形成から20世紀後半の産業化までを含めた多面的視点から、比較研究する。

2000年度 429万円

G 国際・国内学術交流

1. 国際学術交流室

国際学術交流室は、本研究所の国際学術交流を推進するために、2001年に設置された。研究所は、アジア研究における国際交流を本格的に推進するために、英文の国際学術雑誌 *International journal of Asian Studies* の刊行を計画している。この雑誌は、日本を含むアジアで行われているアジア研究の先端的な成果を発信することを重視しつつ、アジア研究に関する世界的な研究交流を目指している。年2冊、ケンブリッジ大学出版会から刊行される予定である。本交流室は、この雑誌の編集業務を担当している。

2. 交流協定

a. 香港大学アジア研究センターとの学術交流協定

本研究所が交流拠点の役割を果し、東京大学の海外学術研究拠点を強化する一環として、1995年10月本研究所は香港大学アジア研究センターとの間に交流協定を結び、共同研究を開始した。協定の内容は、(1)共同研究の推進、(2)研究者の交流、(3)資料・研究情報の交換の三項からなる。

(1)アジア研究ネットワークの形成、(2)アジア研究情報センター設立プロジェクト、(3)珠江デルタ、新界、香港の社会変化の比較研究、(4)中国の経済発展と企業家、(5)香港社会史、(6)香港の選挙制度と政治意識の変化、などがあり、それぞれに、資料調査、現地研究、国際ワークショップなどが進められている。

2000年10月に協定を更新した。

b. 中国・復旦大学との学術交流協定

東京大学と復旦大学との間における学術交流協定は、1991年10月に結ばれた。この協定の運用は、東京大学では、当初理学部が担当部局であったが、1996年に更新期限となり、その後東洋文化研究所が担当することとなった。交流の内容

は、両校間における(1)教官、研究者、院生、学生の交流、(2)共同研究の計画と実施、(3)講義とセミナーの実施、(4)学術情報及び学術刊行物の交換、などである。

東洋文化研究所では、すでに、東アジア歴史地理研究等個々の共同プロジェクトで復旦大学と研究交流を進めてきたが、大学間交流を担当するに際し、より多角的・総合的な交流を進めていきたい。

2001年12月に協定を更新している。

c. シンガポール国立大学芸術・社会科学部との学術交流協定

1997年4月にシンガポール国立大学芸術・社会科学部と結んだ学術交流協定を2000年1月に同学部との5ヵ年間の協定に改定した。研究者の交流と研究資料の相互交換を主な目的とするこの協定はまた、当研究所の先端地域研究プログラム「東南アジアを結節点とする域際アジア交易・交流と移民社会の役割」を効果的に推進するうえでも、重要な役割を果たすものと位置づけられている。東アジア、南アジア、西アジアの各地域の間の人・物・文化の移動と交流が東南アジアという回路を通じてどのように行われてきたかを研究するうえで、シンガポールは格好の観察地点のひとつとなるからである。

d. タイ国・カセサート大学経済経営学部との学術交流協定

1995年3月から5ヵ年に渡り、タイ国カセサート大学経済経営学部との間で学術交流協定を実施してきた。この間、研究者の相互交流の面で多くの成果をあげた。新しい構想の下に協定内容を変更させる意図で、2000年春以降への協定の更新は一時停止することにした。

e. インドネシア大学日本研究センターとの学術交流協定

インドネシア大学日本研究センターにおける共同研究の推進と人材育成のために1997年以来国際協力事業団(JICA)による協力プロジェクトが行われているが、当研究所は社会科学研究所と共同でこのプロジェクトの実施のための要員の派遣に当たってきた。この事業を制度的に保証する措置として、2000年9月に同センターとのあいだで5ヵ年間の学術交流協定を結んだ。その主な目的は、教官および大学院レベルの若手研究者の交換、日本とインドネシアの双方にまたが

る社会科学分野の共同研究の実施，シンポジウムやワークショップの開催，研究情報の交換の4項目である。

3. 外国出張（2000・01年度）

研究所スタッフの外国出張の件数は，2000年度75件，2001年度78件であった。国別・期間別の数字は以下の通りである。

一か月以上		一か月未満			
国名	人数	国名	人数	国名	人数
アメリカ合衆国	4人	中華人民共和国	15人	トルコ	2人
イギリス	3人	インドネシア	10人	ノルウェー	2人
インド	3人	台湾	10人	マレーシア	2人
イタリア	2人	タイ	9人	イラン	1人
エジプト	2人	大韓民国	9人	エジプト	1人
中華人民共和国	2人	ラオス	9人	カンボジア	1人
ミャンマー	2人	イギリス	7人	クロアチア	1人
イラン	1人	アメリカ合衆国	7人	スペイン	1人
インドネシア	1人	シンガポール	7人	スリランカ	1人
シリア	1人	ベトナム	6人	バハレーン	1人
台湾	1人	香港	5人	フランス	1人
ネパール	1人	イタリア	4人	南アフリカ	1人
パキスタン	1人	インド	4人	ヨルダン	1人
フランス	1人	ネパール	3人	ロシア	1人

4. 外国人研究者等の受入れ (2000・2001年度)

氏名・所属・身分	期間	研究課題
徐 蘇 斌 (東京造形大学・非常勤講師)	1999. 4.23 ~00.10.22	近代日本建築文化史
宮崎 広和 (ノーウエスタン大学人類学部・講師)	1999. 8. 1 ~00. 7.31	トランスナショナル状況と社会関係—東京とシカゴの先物取引市場における日本人とアメリカ人
田 寅 甲 (ソウル大学校・人文大学東洋史学科・講師)	1999. 7. 1 ~00. 6.30	1920・30年代東アジアの情報流通と“上海ネットワーク”
Muhammad Sabry Youssief (ヘルワン大学文学部歴史学科・講師)	1999. 9. 1 ~01. 8.31	オスマン期エジプトの知と思想
王 震 中 (中国社会科学院歴史研究所・副研究員(教授))	1999. 9. 6 ~00. 9. 5	日本における近代以降の中国研究
Adiole Emmanuel (東京大学大学院法学政治学研究科・博士課程)	1999.10. 1 ~01. 9.30	日本のエネルギー安全保障外交と東アジアの国際政治
Wenran Jiang (アルバータ大学・助教授)	2000. 1. 5 ~01. 1. 4	グローバルパワーとしての中国台頭に対する日本の反応
何 磊 (中国中医研究院・基礎医学研究所・講師)	2000. 3. 1 ~01. 2.28	中日医学思想の比較研究
Chevalerias Philippe (現代中国研究センター・研究員)	2000. 3. 1 ~01. 2.28	日本・台湾・中国の三角経済関係：密貿易から日台合併企業まで
禹 濟 昌 (St. Antony's College, Oxford)	2000. 4. 1 ~01. 3.31	日中戦争期中国の通貨安定政策
呂 静 (聖心女子大学・非常勤講師)	2000. 4. 1 ~01. 3.31	中国春秋時代の盟誓に関する基礎的研究
王 三 慶 (国立成功大学中文系・教授)	2000. 5. 1 ~00. 7.30	敦煌書儀・敦煌齋願文書に関する研究
許 紫 芬 (暨南大学歴史学研究所・副教授)	2000. 8. 1 ~01. 1.31	山西票号資料研究
王 翠 玲 (法光仏教研究所・講師)	2000. 4. 1 ~01. 3.31	唐代禅宗史の研究
辛 珠 柏 (成均館大学校・講師)	2000. 6.25 ~00. 8. 6	朝鮮軍と台湾軍を通して見た日本の植民地政策の比較研究(1931-45)
Elizabeth Koll (Case Western Reserve university 助教授)	2000. 6. 8 ~00. 7. 8	中国の鉄道に関する社会経済史研究
季 紅 真 (中国作家協会創作研究部・副研究員)	2000. 9.30 ~00.11.28	1990年代日中女性文学の比較研究
Christian Henriot (リヨン大学東アジア研究所長・教授)	2000. 6.30 ~00. 9.30	上海・長崎関係史研究
趙 曉 春 (国際関係学院国際政治学部・副教授)	2000.10. 1 ~01. 9.30	二十一世紀日本外交戦略の発展方向
李 南 南 (中国現代国際関係研究所)	2000.10. 1 ~01. 9.30	21世紀に向かう中日関係

氏名・所属・身分	期 間	研究課題
Kohinoor Begum (バンガラカレッジ・助教授)	2000. 7. 1 ～01. 3.31	バングラデシュ・ガーメント産業での女性労働者問題
徐 希 慶 (ソウル大学校社会科学大学政治学科・博士課程)	2000. 8.11 ～02. 8.10	韓国の「第一共和国憲法」と日本国の憲法における自由主義研究：憲法制定過程における政治的論争を中心に
周 維 宏 (北京日本学研究中心・教授)	2000.11. 6 ～01.11. 5	戦後中日農村工業化現象比較研究－中国江南地域と日本の比較を中心に
Arpita Mathur (Jawaharlal Nehru university・博士課程)	2000. 9. 1 ～01. 8.31	冷戦後の日中関係
Jamie Berger (ハーバード大学・博士課程)	2000. 9. 1 ～02. 4.16	江戸時代の長崎在住華僑人
徐 学 群 (中国現代国際関係研究所・助理研究員)	2000.11. 1 ～02. 3.31	日本人の中国観
安 清 市 (ソウル大学政治学・教授)	2000.12. 1 ～01. 9. 1	21世紀における日韓外交
Brigitte Marino (ダマスカス・フランス アラブ研究所・研究員)	2000.11.20 ～01.11.19	オスマン時代のシリアにおける都市領域
チェ・キュスン (Hanyang University Center for Local Autonomy・研究員)	2001. 1.15 ～01.12.31	日本統治下の朝鮮における地方自治の構造と政治－文献サーベイ
劉 小 楓 (香港漢語基督教文化研究所・学術総監)	2001. 8.25 ～01.10.15	東アジア文化の近代化過程における西欧諸概念の変容
Teow See Heng (シンガポール大学・日本学科主任・助教授)	2001. 6. 1 ～02. 4.30	1880-1930年の日本・シンガポール関係市
Adeoti, John Olatunji (国連大学高等研究所・派遣研究員)	2000.12.15 ～01. 8.31	Technology Investment in Pollution Control in Sub-saharan Africa
曾 支 農 (武漢大学中国経済社会史研究所・客員研究員)	2001. 4.15 ～03. 3.15	汪政権による「淪陥区」社会秩序の再建過程に関する研究
Tobie Meyer-Fong (ジョンスホプキンス大学歴史学部・準教授)	2001. 6. 8 ～01. 6.19	太平天国の地域社会への影響－揚州の場合
衣 若 芬 (中央研究員中国文哲研究所・副研究員)	2001. 5.25 ～01. 6. 7	宋代題画文学の研究
Sushila Narsimhan (デリー大学中国日本研究学部・助教授)	2001. 7. 1 ～02. 1. 1	Role of Japan in China's Transformation, 1896-1911
Siti Sundari Tjitrosubono (インドネシア国立ガジャマダ大学・特任講師)	2001. 7.20 ～01. 8.20	現代インドネシア文化・文学
Hayden Lesbirel (ジェームズクック大学人文科学部・助教授)	2001. 7.16 ～02. 1.16	Politics of Japanese energy security policies
李 波 (國務院発展研究センター・アジア・アフリカ発展研究所・研究実習員)	2001.10.31 ～02.10.30	日本の国際政治地位の向上と日中関係に及ぼす影響

氏名・所属・身分	期間	研究課題
熱比燕 (人文社会系研究科・研究生)	2001.10.1 ～03.9.30	ウイグル人作家の歴史に関する創作活動
Manish Sharma (ジャワハルラル・ネルー大学・東アジア研究センター・博士課程)	2001.9.26 ～02.12.26	The reforms in the Japanese Banking System during Post-Growth Period
劉素芬 (中央研究院近代史研究所・副研究員)	2001.10.1 ～02.3.31	大阪商戦会社與台湾海運発展(1896-1945)
Brij Mohan Tankha (デリー大学中国・日本学科・リーダー)	2001.10.5 ～01.10.14	近代日中関係史並びに近代思想史に関する資料調査
前田環 (ワシントン大学美術部美術史課・博士候補生)	2001.10.18 ～02.4.30	富岡鉄斎と中国文人画の関係
劉樹成 (中国社会科学院経済研究所・研究員)	2002.3.5 ～02.3.19	
朱蔭貴 (中国社会科学院経済研究所・研究員)	2002.3.5 ～02.3.19	
王振中 (中国社会科学院経済研究所・教授)	2002.3.5 ～02.3.19	

5. 内地研究員の受入れ

氏名・所属・身分	期間	研究課題
関礼子 (帯広畜産大学畜産学部講師)	2000.5.1 ～01.2.28	水環境と水系文化に関する研究-「マイナー・サブシステム」の身体性の議論に着目して
三尾裕子 (東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教授)	2001.5.1 ～02.2.28	漢民族社会の宗教の動態に関する歴史人類学的研究

6. 日本学術振興会特別研究員(博士課程修了者)の受入れ

2000年度

氏名	研究課題
吉田京子	十二イマーム・シーア派のイマーム論の構造-ガイバ論の解釈を通して
黒木(松井)真子	自由貿易体制の形成過程とオスマン帝国-近代国際体系の拡大理論の再検討
堀井優	中世末・近世初頭における東地中海世界秩序の変容

中川 恵	君主制「国民国家」論—モロッコとヨルダンの事例
佐藤 齊華	移住・開発・伝統—ヒマラヤ山地民社会のグローバル化とローカル化
菊地 達也	イスマール派古典思想とその思想史的展開

2001年度

氏名	研究課題
佐藤 齊華	移住・開発・伝統—ヒマラヤ山地民社会のグローバル化とローカル化
中川 恵	君主制「国民国家」論—モロッコとヨルダンの事例
黒木(松井)真子	自由貿易体制の形成過程とオスマン帝国
堀井 優	中世末・近世初頭における東地中海世界秩序の変容
菊地 達也	イスマール派古典思想とその思想史的展開
吉開 将人	出土資料から見た中国内地一周縁構造の成立過程についての研究
宮本 徹	出土文字資料による上古漢語諧声系統の復元

7. 海外との図書・寄贈・交換

海外の研究機関と、『東洋文化研究所紀要』、『東洋文化』、『センター叢刊』、『明日の東洋学』等の本研究所発行の図書の寄贈および交換を行っている。寄贈および交換先は33か国、218機関に及んでいる。なお、国内については293機関と寄贈・交換を行っている。